

操作ボタンを押すと、吊り下げ式のクレーンが、奥から手前に向かって平行に動き出した。落とし口の真上まで来たところでボタンから手を離す。クレーンが動きを止める。いい感じだ。由紀子は鼻から息を吐いた。最後のボタンを押す。クレーンの先端に取り付けられた二本のアームが開き、つかんでいたクマのぬいぐるみを落とす。よし、と思った瞬間、クマは落とし口の角にぶつかってバウンドし、仲間たちのいる山に戻った。「ああ、惜しい」と声をあげたのは、後ろで見ていたアルバイト店員の女子大生だ。

ゲームセンターの喧噪が戻ってきた。無になれる時間はいつも一瞬で終わってしまう。振り向こうとして腰に痛みが走った。

「川野さん、大丈夫ですか？」

中途半端な姿勢で固まっている由紀子に、店員が心配そうに声をかける。毎週日曜、このゲームセンターに通い続けて一年と少し。すっかり顔と名前を覚えられていた。大卒二年生だという店員とは親子ほど年が離れている。いい年をして一人、黙々とUFOキャッチャーにいそしむ自分が周りからどう見えているのか。時おり不安になるが、できるだけ考えないようにしている。

笑顔で応えようとしてマスクの存在を思い出し、「大丈夫」と声に出して言った。これが今初めての会話だ。

「背が高いと、かがむ姿勢は負担がかかって大変ですね」

由紀子が腰痛に悩まされていることも、この店員は知っている。身長は一六八センチだ。店員は「かっこいい」と目を輝かせるが、由紀子にとってこの身長はコンプレックス以外の何ものでもない。

「あのクマのぬいぐるみ、さしあげましょうか？ 今なら誰も見てないし」

店員が悪びれたふうもなく言う。

「ううん、いいの。ズルして手に入れたって意味ないし」

すると店員は、制服のポケットから取り出したカギの束を奥に押しこみ、「そりやそうですよね。すみませんでした」と肩をすくめた。

「だいたい、誰も見てないって言うけど、防犯カメラがあるんじゃないの？」

「そうでした」

再び肩をすくめて天井を見上げた拍子に、耳のあたりが強い光を放った。

「あら、そのピアス、本物の石？」

思わず聞いていた。

「分かります？」

店員の目がパッと開く。同時にまつ毛も全開になる。マスク着用が当たり前になった今、彼女のまつ毛エクステにかける情熱は凄まじいものがあった。

「何となく。輝きが違っているか」

適当に返した言葉に、店員が「さすが」とうなずく。なにが「さすが」なのか。「年の功」とでも言いたいのだろう。

「彼氏からの誕生日プレゼントで」

そこで言葉を切った。こちらのリアクションをうかがっている。

「いいわね」

このひと言で十分だった。店員の不織布マスクのプリーツが動く。笑みを浮かべたのだ。

「誕生日は四月だったんですけど、休業要請でお店が閉まっちゃって。休業する前から、プレゼントはこれがいいって彼氏に言っていたんです。でも、すごく高価だし、まさか本当に買ってくれるとは思っていませんでした」

そう言いながら髪をかきあげる。耳もとのピアスがまたきらめいた。

「彼氏が言うんです。プレゼントする時期が遅れるけど、店が再開するまで待とうって。二十歳の誕生日は特別だからって。それで、こないだ店がようやく営業を再開して、一緒に買いに行っただけです」

へえ、すてきね、などと相づちを打つのも疲れてきて、三か月待つ間に彼氏と別れたりしなくて良かったわね、などと嫌味を言いそうになる。

「ということは、ダイヤモンド？」

代わりに前向きなことを言ってみた。ダイヤモンドは四月の誕生石だ。店員の頬がマスクをはみ出すほどに、みるみるピンク色に染まる。

由紀子はめまいを覚えた。まぶしい。全身で恋をしている。それを隠そうともしない。やっぱ若いなあと思う。

「今日はこれでおしまい。また来週ね」

まだ話し足りなさそうな店員を尻目にゲームセンターを後にした。外はまだ昼間のよう。マスクを外して自転車にまたがった。

アパートの駐輪スペースに自転車を止め、前かごのトートバッグをつかむ。ぬいぐるみをたくさん入れられるようにと思ってこのカバンにしているのだが、今日の戦利品は一個だけ。いつもこんな感じだ。それでも日曜になると由紀子はゲーセンに出かけていく。

外階段を二階にあがってすぐ目の前が由紀子の部屋だ。二階建ての古い木造アパートではあるが、中は広く、入居時に壁紙とフローリングを張り替えてもらったので、さほど古さは感じない。住人は年寄りばかりらしく、由紀子のような年齢の、しかも女性が住むのは珍しいと、越してきた当時、家主である高齢女性がしきりに話していた。由紀子にとって重要なのは家賃の安さだ。役所勤めなのに、と家主は首をかき上げたが、由紀子は非常勤の職員である。正規職員とは待遇に天と地ほどの差があった。

入居後、すぐに大きなソファとローテーブルのセットを購入した。海外ドラマでソファに足を投げ出して寝そべるシーンを観て、昔から憧れていたのだ。L字型ソファの短い辺に、動物のぬいぐるみが並んでいる。そこに今日手に入れたばかりのぬいぐるみを加える。ソファに置き場所がなくなれば、古いものから順にクローゼットに移動させる。数えたことはないので正確な数は分からないが、この一年で五十個ほどになっているはずだ。

トートバッグを床に投げ出してソファに倒れ込み、クッションに顔をうずめた。視界が遮られると、先ほどの店員の幸せそうな顔がいつそう鮮やかに脳裏に浮かぶ。首すじに冷たい風が当たる。サウナ状態だった部屋を一気に冷やそうと、エアコンがうなりをあげていた。

クッションから顔だけ上げて、目の前のぬいぐるみたちに「ただいま」と声をかける。店員の顔が消えた。

夕食前にソファで缶ビールを飲みながらミックスナッツをつまんでいると、今度は元同僚の顔が浮かぶ。由紀子がゲームセンターに通うきっかけを作った張本人だ。一年前、元同僚から餞別を渡された。花柄のおしゃれな封筒だったので手紙かと思ったら、二万円が入っていた。嫌な気持ちになった。そもそも、去る側が残る側に餞別を送るなんてあべこべだ。しかも彼女は退職ではなく、別の部署に異動するだけだった。お金を返そうと思いつながら、結局、受け取ったままになった。

二万円を無駄に使いきる方法を考えた。その答えがUFOキャッチャーだ。毎週、駅前のゲームセンターに通った。プレイ中は嫌なことを忘れられた。四か月ほどで餞別を使いきり、ゲームセンターに通う習慣だけが残った。

ミックスナッツは全種類をまんべんなく食べないと気がすまない。今日はカシューナッツ、アーモンド、クルミ、ヘーゼルナッツの順に食べ、一周すれば、またカシューナッツから始める。脳内の映像が職場の場面に切り替わる。一斉休校の話で盛りあがる平成生まれの女性職員たち。自分より十歳以上も若い彼女らに、すでに小学生になる子どもがいる。みな一様に興奮し、深刻そうな顔をし、それでいて生き生きしているように由紀子には見えた。

四種類のナッツが三種類になり、二種類になる。ナッツの割合が均等でないのがいつも残念だ。食べながらソファに並ぶぬいぐるみを眺める。真ん中にいるのは白い猫のダ

リアだ。目下、人気急上昇中の市のマスコットキャラクターである。紫色でふちどられた目にアーモンドをタテにした形の瞳、不敵な笑み。著作権を管理する市がダリアの使用料を原則無料としたため、地元企業が競ってグッズを売り出している。UFOキャッチャーの景品になっているダリアのぬいぐるみもゲーム会社のオリジナル商品で、他では手に入らない。

缶ビールを飲みきってから、ようやく夕食の支度に取りかかる。一日三食、基本は自炊だ。健康にも財布にもそれが一番いい。冬は鍋、夏は麺類。今晩はそうめんを茹で、キムチ、納豆、オクラに細かくちぎった焼きのりをまぶして出来上がり。そうめんのほか、パスタ、中華そば、うどんなどをベースに、トッピングを変えれば何日でも飽きずに食べられる。なので料理の腕はいっこうに上達しない。

そうめんと具をかき混ぜて食べながら、ローテーブルの上に放置されたままの宅配ピザのチラシに手を伸ばす。幼い字で書かれた住所と電話番号。もうすっかり暗記していた。ふと横を向くと、ダリアが大きな瞳でじっとこちらを見ていた。

明けて月曜は、燃えるゴミの日だ。六時半から始まるラジオ体操の前にゴミ出しをするのが習慣になっている。アパートから少し離れたゴミ置き場まで行って戻ってくる、外階段をおりてくる男性が目に入った。ゴミ出しのとき、たまに見かける人だ。年齢は由紀子の父親と同じくらいか。白髪まじり、痩せぎみ、猫背。これといった特徴はないが、いつも同じピンクの蛍光色の上着をはおっているのが目を引いた。二階のどの部屋の住人だろうか。

階段をおりてくる男性と目が合い、軽く会釈する。向こうもわずかに頭を下げた。身長は自分と同じくらいだと由紀子は見当をつけた。男性が階段をおりきるのを待ってから階段をのぼる。玄関を入るとラジオの音が聞こえてきた。男性アナウンサーのはきはきした声。スマホのボリュームを上げて窓の枠に置く。ラジオ体操の歌に続き、「ラジオ体操、第一——」というかけ声に背すじが伸びる。

両腕を体の前から上げて、背伸びの運動。下ろすときは横から。手足の運動は腕を振る動きに合わせてかかとを上下させるのがポイントだ。腕を大きく回す、胸を反らす、体を横に曲げる。全ての動作に共通するのは、両腕をめいっぱい伸ばすことだ。これがけっこうきつい。体を前後に曲げる、体をねじる、体を回す運動は腰痛予防に効果があるらしいので特に念入りに行う。予防ということは、腰痛になってしまった後では逆効果だろうか？ まあいいや。実際、腰痛はましになった気がするし、などと考え事をしながらでも体はしっかりと動く。

二、三か月前からにわかにな目されるようになったラジオ体操であるが、由紀子が始めたのはそれより前である。腰痛のさらなる悪化を阻止するためだ。それに四十を過ぎてから体力の低下を実感していたというのもある。最初は抵抗があった。たった一人で

ラジオ体操をするなんて、孤独の極みではないか。ラジオ体操は集団でするものだ。三十年以上も前の小学校の夏休みだって、学校の運動場で他の子たちと一緒にだった。しかし、背に腹は代えられない。費用もかからず、手軽に始められる体力作りとなると、他に思いつかなかった。

そして今。腰痛はともかく、階段で息切れすることが減ったし、何より姿勢が良くなった。学校休校や外出自粛を受けて、自宅でラジオ体操をする人が増えているという。その中には一人暮らしの人も当然いるだろう。今この時間、ラジオを前に、自分と同じように一人で腕を振ったり飛びはねたりしている人たちが日本中にいると思うと、ほんの少し寂しさが紛れた。

逆に一人になりたいのが職場である。同じフロアで一日中、大勢の職員と顔をつき合わせるのは息が詰まる。だから毎朝、由紀子が一番乗りで出勤する。誰もいないフロアの窓を開け放ち、給湯室のポットで湯を沸かしてコーヒーを淹れる。冷房は始業十分前から稼働させる決まりになっているせいか、この時間に出勤する職員は他にいない。束の間の静寂。窓から入ってくる風が心地良い。今年の夏は暑くなるらしいが、まだホットコーヒーでもいけるぐらいの気候だ。となりの職員の机の上は書類であふれかえっている。これでどうやって仕事をするのか不思議でならない。窓口の長いカウンターには、そこかしこにダリアが鎮座している。UFOキャッチャーの景品より一回り小さいぬいぐるみだ。ダリアの名前は、姉妹都市の特産物である花にちなんでつけられた。豪雨災害に見舞われた遠くの姉妹都市を応援しようと、名前の一般公募を急ぎよ取り止め、市が命名した。英断だと思う。その姉妹都市のすぐ近くに由紀子のふるさとがある。

高飛車で気分屋というキャラクター設定が評判を呼び、市のサイトの「よくあるご質問」では、「ダリアがつけているダリアは、どこで手に入るのか」という質問が常に上位にくる。わざわざ役所に来て質問する市民もいるくらいで、由紀子も何度か窓口で対応した。濃い紫色の花弁がぎゅつとつまった豪華絢爛な品種はキャラクターの性格とびつたり合っていて、ダリア生産地の同県人としては少しばかり誇らしい気持ちになる。

田舎の両親は共に七十を超えているが、今のところ元気で暮らしている。今年は正月以来、会っていない。ゴールデンウィークも帰らなかった。地元ではまだ陽性者が一人も出ていない。母親からの電話は増えた。自宅待機中に亡くなった一人暮らしの中年男性のニュースが流れたときには、安否確認の電話が毎日かかってきた。第一発見者は、心配して訪ねてきた男性の父親だった。由紀子は男性の父親のことを思った。そこに自分の両親の姿が重なった。一方の母親は、亡くなった男性に由紀子を重ねていたのだ。いろいろ考えさせられる日々が続いている。新型ウィルスのせいだけではない。もっと前からの話だ。気がつけば過去の記憶をなぞっている。昨日より今日、今日より明日が悪くなる。そんな気がしてならない。コーヒーはすっかり冷めていた。

仕事帰りに駅前の商店街で今川焼を買う。一個七十円。週始めの仕事がんばった自分へのご褒美だ。それから駅前のスーパーには行かずに、駅から遠い方のスーパーに行く。店内を回りながら由紀子はため息をついた。やはり駅前のスーパーの方が安い。

「こんにちは」

声が出た方を見て由紀子はぎよつとした。見覚えのある男の子が、マスクをあごにずらして人なつっこそうな笑みを浮かべている。と思ったら男の子はあつという間に陳列棚の向こうに姿を消した。

ここで会うとは思わなかった。男の子とその母親に会わないですむように、駅から遠い方のスーパーにわざわざ来ているのに。

一か月前、ゲームセンターに行った帰りに駅前のスーパーに寄ったときのことだった。レジの清算をすませ、持参したエコバッグに買ったものを詰める由紀子の横にいたのがあの男の子だ。由紀子に背を向け、隣の母親にピザが食べたいと駄々をこねていた。

「買ってくれるって、お母さん言ったじゃん」

「言っていない」

母親は男の子の方を見ないまま、かごに山盛りの商品をもすごいスピードでレジ袋に移していた。

「言った」

「言っていない」

「言ったもん」

足にまとわりつく男の子を、母親は袋詰めの手を止めずに、体をよじって振り払おうとした。

「いいかげんにしなさい、もう」

「ピザが食べたい」

「食パン買ったでしょ。チーズも買った。チーズのせてトーストしたらピザと一緒に」

母親が早口で畳みかけた。

「ぜんぜん、ちがううう」

男の子は地団太を踏んだ。すでに泣き顔だった。「じゃあこれ！」と男の子が腕を伸ばして母親の目の前に広げたのは宅配ピザのチラシだった。

「何これ、どこから持ってきたの」

「おうち」

「なんでそんなの持ってくるのよ。邪魔だって」

母親の手で振り払われたチラシが由紀子の方に飛んできた。男の子が悲愴な顔でチラシをつかみ、大事そうに胸に抱えた。

「ぼく、自分で電話するから」

「何」

「ピザのお店」

「はあ？」

母親の声が一オクターブ上がった。

男の子はなおも母親にチラシを見せようとして振り払われ、チラシが由紀子の足もとに落ちた。それを拾おうとした男の子が、そのまましゃがみこんで動かなくなった。床に置いた由紀子のトートバッグの中から、さつきUFOKキャッチャーで手にしたぬいぐるみが顔をのぞかせていた。由紀子はピザのチラシを拾いあげながら、「ダリアが好きなの？」と声をかけた。男の子がぱっと上を向く。

「うん、大好き」

男の子は由紀子の目を見て力強くうなずくと、すぐまたダリアに視線を戻した。

「じゃあ、あげる」

弾みでそう言っていた。由紀子がトートバッグからダリアを取り出すのを、男の子は目を丸くして見ていた。それからおずおずと差し出した両手で受け皿の形を作った。そこにダリアをのせてやる。

「お母さん、お母さん！」

空になったレジかごを返しに行って戻ってきた母親に向かって、男の子が声を弾ませた。母親はパンパンに膨らんだレジ袋を両手に一つずつ掴み、急ぎ足で出口に向かいながら男の子の方を振り返った。男の子が由紀子の方を指さした。母親はこちらには目もくれず、「知らない人から物をもらっちゃダメって、いつも言っているでしょ」と甲高い声をあげ、周りにいた客が振り返った。母親は近くの台の下に備えつけられたゴミ箱をあごでしゃくって何かを言った。まさか。由紀子はぞっとした。男の子が激しく首を横に振る。

いつの間にか由紀子は親子の近くに来ていた。

「何、言ってるの。きれいかどうかも分からないし、そんなもの家に持ちこまないで。ほしいなら買ってあげるから」

「これがいい」

「ダメだって言ってるでしょ」

「捨てるなんてかわいそうだもん」

「貸しなさい」

母親は片方の買い物袋を床に置き、男の子の手からぬいぐるみを奪い取るやいなや、台の下のゴミ箱に乱暴につっこんだ。とたんに火がついたように泣き出した男の子を「いいかげんにしなさい」と叱りつける母親と、一瞬、目が合った。母親の視線は由紀子を素通りし、男の子の腕をぐいぐい引っぱって行ってしまった。ゴミ箱に飛びつきたい衝動を抑えながら台に近づき、ダリアを拾いあげた。白い頬に赤い汁がついていた。ゴミ箱を見ると、肉か魚の血がついた空の容器が大量に捨てられていた。

宅配ピザのチラシを返しそびれたことに気づいたのは、家に帰ってからだった。チラシの裏に店の電話番号が記載され、その下に、つたない字で電話番号と「〇〇まち3の9」と書かれていた。名前は知っている。男の子が胸にチューリップの形をした名札をつけていた。

以来、何度も店に電話をかけそうになる。あの母親の困った顔が見てみたい。

要らないのなら、返してくれば良かった。捨てるなんて常軌を逸している。このご時世がそうさせたのか。どこもかしこも殺伐としている。自分だってそうだ。さつき男の子が挨拶してきたのを無視してしまった。

「こんにちは」

声に出して言うと、そばを通りかかった客が怪訝そうに振り返った。

月二回の火曜は紙ゴミの日だ。古新聞と雑誌を大きな紙袋に入れ、小さな紙、ティッシュの箱、トイレトペーパーの芯などのいわゆる「雑紙」は小さい紙袋に入れ、両手に提げてアパートの階段をおりる。寝不足だった。夢を見た。元同僚の加奈子とカフェでお茶をしていた。役所の非常勤職員として同時期に採用された加奈子とは同い年で、年齢的に正規職員は望めない者どうし、すぐに意気投合した。彼女は昨年、正規職員になった。「お世話になりました」と他人行儀な挨拶とともに渡されたのが二万円の餞別だ。

加奈子が「元気だった？」と何事もなかったかのように微笑む。友だちに戻れるかもしれない、と思った。しかし、そのためには確かめておかなければならないことがある。由紀子は紅茶を口に含み、どう話を切り出そうかと頭をめぐらせた。加奈子はわざと知らせなかったのか。事実を知りたい。加奈子の前にはケーキと紅茶セットが置かれている。彼女はティーポットに被せた保温用のカバーを外し、優雅な手つきで紅茶をカップに注ぐ。それを口もとに運び、まず香りを楽しむ。見慣れたしぐさだ。由紀子もカップに手に伸ばそうとしたが、目の前には水とおしぼりしかなかった。今の今まで確かにあったはずなのに、と首をかしげながらメニューを開く。ケーキセットは千五百円もした。飲み物だけにしようかと迷っていると、加奈子が紅茶のカップを手に微笑んだ。「お金は私が出すから、好きなものを頼んでいいわよ」

あつと思ったときには紙袋がひっくり返っていた。古新聞や雑誌がスキーのように階段の斜面を滑降り、階段の下にいた男性の足にぶつかった。ピンクの上着をはおった男性は散乱した新聞や雑誌を拾おうと腰をかがめた。

「すみません」

慌てて階段を駆けおりる。

「これ、捨てるなら、もらっていいかな」

男性は拾ったカレンダーを見つめて言った。昨年末、実家に帰省したとき、母親から

渡されたものだ。全てのページのいちばん下に、寺の名前と住所、連絡先が印字されている。母方の親戚が寺の住職をしている関係で、毎年、母のもとに大量に送られてくる寺のカレンダーだ。由紀子も決まって三本は持たされる。「一人暮らしなのに、こんなに要らないって」と母に言うのだが、「部屋と台所とトイレ用。あなたの家、けっこう広いじゃない。助けると思っ、ね」と押し切られると断れない。

母の言うとおり二本は部屋とトイレに飾ったが、台所にはカレンダーをかける場所がない。一本くらい捨てても罰は当たらないだろうが、もらってくれる人がいるなら願ってもないことだ。しかも一年の半分以上が過ぎてしまったカレンダーである。どうぞ、どうぞ、と由紀子は何度もうなずいた。

「親鸞しんらんは、いいね」

カレンダーをめくりながら男性がつぶやく。月ごとのイラストの横に「親鸞聖人のおことば」が書かれているのだ。「はあ……」と由紀子が気のない反応を示すと、男性が顔をあげてこちらを見た。

「だって九十まで生きたんだよ。あの時代に」

あの時代、と言われてもピンとこないが、現代でも長寿といえる年齢だから、昔となると、なおさらすごいだろう。

ラジオ体操の時間が迫っていた。由紀子は拾い集めたものを紙袋に入れ、男性に会釈をしてゴミ置き場に急いだ。

データ入力しながら、パソコンの横にある小さな紙袋に目をやる。昼休憩のとき、向かいの席の女性職員がくれたものだ。有名な紅茶専門店のロゴがプリントされた紙袋の中身は手作りクッキーだった。おしゃれなフレーバーティーよりも甘いものを由紀子が喜ぶと分かっ、ての気づかいが嬉しい。今日は由紀子の誕生日だった。

仕事終わりにようやくお礼を言うチャンスがおとずれた。由紀子と同年代の女性職員は、「つまらないものだけ」と照れたように笑い、「川野さんにはいつも助けてもらっているから」と言った。それを聞いて、由紀子の気持ちはたちまち沈んだ。

公務員で良かった、というのが口癖のこの女性職員には子どもが三人いる。子どもの熱や病気で早退したり、急に休んだりするたびに由紀子が仕事のフォローをしている。それはいい。彼女は産休、育休を三年ずつ（合計九年！）取得し、仕事に復帰すれば、前と変わらない給料が保証される。その額は由紀子の倍以上だ。

どこでどう間違っ、てこうなったのか。気がつけば、そんなことばかり考えている。

大学を卒業してすぐ民間の会社に就職した。当時は就職氷河期の真っ只中だったので、両親も手放しで喜んだ。その会社を五年で退社し、次に正社員として採用された会社は、サービス残業と休日出勤の嵐だった。心身のバランスを崩した。残業のない事務職を求めて行きつ、いたのが役所の仕事だ。民間の正社員であんなにしんどい思いをするなら、

役所の非常勤でかまわないと、そのときは思った。事務処理は得意なので、役所の仕事は性に合っている。市民の役に立っているという実感がダイレクトに得られ、やりがいのある仕事だ。しかし、何年働いても給料は一円も上がらず、ボーナスもない。

学生時代は学業に励み、社会人になってからは仕事に打ちこんだ。人生の節目では将来を見据えて真剣に悩み、そのつどベストだと思っ道を選んできたつもりだ。

応募資格の上限年齢が上がり、自分にも正規職員になるチャンスがあったことを知ったのは、採用試験の後だった。

——川野さんは採用試験を受けなかったんだね。

課長から言われて初めて、試験の存在を知った。そう伝えると課長は驚いていた。加奈子に応募要項を渡した際、コピーして由紀子にも渡すよう伝えたそうだ。

「ま、どちらにせよ、同じ課からの合格者は一人までと決まっているけどね」

課長は事もなげに言い放った。

「でも、試験を受けるチャンスは、私にもあったということですよね」

喉の奥がつかえて、うまく話せなかった。

そりゃあね、と課長は思案顔であごに手を当てた。

「川野さんから応募がないから、僕も気にはなっていたんだ。坪井さんが言うには、川野さんは独身で養う家族もないから、非常勤のままでもいいと思っっているんじゃないかって。自分は子どもがいるから非常勤だと経済的に厳しい。そんなことを言っていたよ、たしか」

だからなぜ加奈子をいちいち経由するのか。なぜ直接声をかけてくれなかったのか。課長の胸ぐらをつかんで叫びそうになった。加奈子は正規職員の採用試験に合格し、昨春、満面の笑みをたたえて異動していった。

自転車で信号待ちをしている間にスマホをチェックしようとカバンの中を探っていた、もらったクッキーを職場に忘れてきたことに気づいた。とたんに甘いものを猛烈に食べたくなった。駅前のケーキ屋に寄って、一番小さいホールケーキを買った。高くていたが仕方がない。何ととっても今日は誕生日だ。こうなったら一人でヤケ食いしてやる。

ケーキの袋の持ち手を手首に通し、慎重に自転車をこぐ。もうすぐアパートに着くというとき、突然、手前の角から原付バイクが飛び出してきた。とっさにハンドルを切る。前輪が電柱に激突し、自転車ごと道路に倒れ込んだ。

「おいおい、危ないなあ。ちゃんと前を見て走らないと」

原付バイクの若い男は呆れたように言うと、そのまま走り去った。

痛みと驚きで声も出なかった。横向きに倒れた状態で身動きできない。体の上側の手は動いた。体の上ののっている自転車のハンドルを向こうに押しやり、片方の手と膝を地面につく。何とかうつぶせの状態にはなった。体の下敷きになった側の手のひらは皮

ふがめくれて赤い肉があらわになり、アスファルトの小石が埋まっている。痛い。救急車を呼ぶほどではないというのは分かった。かといって一人ではどうにもならない。誰かいないか。もし母親に電話したら、新幹線に乗って駆けつけるだろうか。ひよっとして父親も一緒に来るかもしれない。くだらないことを考えるのは、それだけ痛い証拠だ。カバンは自転車の前かごに納まっているが、中身が道路に飛び出してしまった。痛みのない側の手と膝とで地面を支え、うつぶせの状態からゆっくり体を起こして座りこむ姿勢になった。これ以上は動けない。やっぱり救急車を呼ぶしかないか、と思ったとき、背後から人の近づく気配がした。

「お姉さん、大丈夫か！」

由紀子の顔をのぞきこんだおじさんは、明らかに自分より年上だった。お姉さんではありません、おばさんです、と心の中でつつこみを入れる。やっぱり痛いのだ。

「救急車、呼んだ方がいいよな。今から呼ぶよ。いい？」

首を横に振った拍子に、電柱のそばに打ち捨てられた白い箱が目に入った。喉の奥がつまった。気がつくときに出さずに泣いていた。

「そんなに痛いの。やっぱり救急車、呼ぶね」

おじさんがスマホを操作する。

「呼ばなくていいです」

声をふりしぼると、血の味がした。立ち上がるうとして、がくと膝が折れ、「危ない」とおじさんに肩を支えられた。

「お姉さん、どうする？ 救急車、呼ぶ？」

まだ言っている。病院に運ばれて入院になったりしたら大変だ。病院代がかかるし、収入も途絶える。ここは何としても立ち上がって、おじさんを安心させなければならぬ。道路沿いのブロック塀に片手をつき、そろそろと膝を伸ばす。その間におじさんは倒れた自転車を起こし、カバンの中身をかき集め、電柱の下にあるケーキの箱を拾ってくれた。

そこに通りがかったのがアパートのおじさんだった。この暑いのに、相変わらずピンクの長袖のジャケットを着ているので、すぐに分かった。「あれ、どうしたの」と寄ってきたピンクのおじさんは、「川野さん、大丈夫？」と言った。

「あれ、佐倉さん、知り合いなの？」

「同じアパートに住んでいる人。何、どうしたの」

佐倉と呼ばれた男性は、由紀子の手を見て、「こりやひどい」と顔をしかめた。

「ちよっと手当てした方がいいよ、これ」

「とりあえずアパートまで送っていいこう。佐倉さんも一緒に来てよ」

「いや、この人の部屋、二階だから。この状態で階段はのぼれないでしょ。それにレイディの部屋におっさんが二人して押し寄せるっていうのも、ちよっと……。川野さんだ

って嫌だよね。かといって、玄関でさよならっていうのも、そのあとが心配だし」

意外によくしゃべる人だ。今の由紀子に返事をする余裕はない。全神経が膝と手に集中し、どくんどくと脈打っている。

「とりあえず、菊ちゃんの店に行こう」と佐倉が言い、「この人、菊ちゃん。このすぐ近くで居酒屋をやっている店長さん」と由紀子に説明した。

がっしりした体格の店長に体を支えられ、由紀子の自転車は佐倉に預けられ、細い路地にある一軒の店の前に来た。店長から渡された鍵を、佐倉は引き戸の鍵穴にガチャガチャとつつこんだ。引き戸を開けると中は思いのほか広い。手前にカウンター、奥にテーブルが二つあった。一つのテーブルに六、七人は座れそうだ。引き戸の横に橙色の暖簾が立てかけてあった。

店長がカウンターの奥から救急箱を持ってきて、消毒液やらガーゼやらを取り出す。トイレ内の洗面台で手のひらにこびりついた泥と血を洗い流す。次にズボンを下ろして膝の状態を確認すると、意外にも出血はなかった。

「すぐに膝を冷やした方がいい。あとで腫れてくるから」と店長は心配するが、人前でジーンズを脱ぐわけにもいかない。

テーブル席で冷たい麦茶を出され、ようやく人心地がつく。膝と手のひらがじんじんと痛むのは全く治まらない。カバンの中を確認する。幸い、スマホは無傷だった。テーブルに置かれたケーキの白い箱に、灰色のまだら模様ができている。生クリームの油分が染み出したのだ。

「それ、ケーキ？」とカウンターの中から店長が言った。うなずきながら、また泣きそうになる。「今日、誕生日だったんで」

言ってしまうは何てことはなかった。涙もすぐに引っこんだ。さつき道路で泣いてしまったのが今さら恥ずかしい。

箱を開けてみる。デコレーションケーキは雪崩が発生した山みたいになっていた。生クリームの中にいちごや板チョコが斜めに傾いて埋もれている。

家に持ち帰って捨てるつもりだったが、「だったら、今ここで食べようよ」と佐倉が言った。箱のシールを見て、「このケーキ、うまいって評判だから、前から一回、食べてみたかったんだ」と笑った。

店長が人数分の皿とフォークを持ってきて、手際よく皿に取り分けていく。ぐしゃぐしゃになったケーキを、二人とも気持ちの良い食べっぷりで平らげていく。つられて由紀子もひとくち口に運ぶ。上品な甘さの生クリームは、牛乳そのものの味がした。

誕生日おめでとう。心の中でつぶやく。

店は相当に古く、由紀子のアパートといい勝負だ。店内を見渡してもメニューらしきものは見当たらない。テーブル席の横に「アルコール類 三百円」「その他 百五十円」

という貼り紙があるだけだ。ずいぶんアバウトな書きようだと思って眺めていると、横から佐倉が「この店、ちよつと変わってるから」と笑った。「僕みたいに金のない人間でも、週に何回かは飲みに来れるし」

「どんな料理を出されるんですか」

向かいに座る店長に聞くと、「てきとう」という答えが返ってきた。

「その日に安く手に入る食材で、作れるものを作って出す。順番に出して行って、お客さんがストップって言ったところで終わり」

「菊ちゃんの料理は何でもいけるよ」と佐倉。「最初に予算を伝えておけば、その範囲でおさめてくれるから、金の心配をしなくて飲めるしね」

「へえ」

「だからほんとに金がなくて、それでも飲みたい、誰かとしやべりたいって時は、酒だけ注文して、ちびちびやつてりゃいいんだよ」

そういう佐倉の前にはチラシで折った手のひらサイズの箱が置かれ、駄菓子や豆菓子の小袋が山盛りになっていた。飲み物さえ注文すれば、無料で食べていいということか。

「ビールだったって、三五〇ミリの缶ビールだよ」と店長が目配せした。「高いって文句を言う客もいるんだ」

「だったらグラスで出すってのはどう？ 量が分からないように」と佐倉が言う。

「それいいね。で、こっそり発泡酒に入れ替えて、原価率を下げるっていう」

「菊ちゃん、悪い人だねえ。ていうか、そんなの味でバレるって」

「じゃあ、第三のビールはどうだろう」

店長は佐倉より十歳は若そうだが、息ぴつたりの会話だ。佐倉がよくしゃべるので驚いた。アパートで見かけるときの印象とずいぶん違う。

アパートまで送っていくと言われたが丁重に断った。自転車を支えにすれば何とか歩ける。問題は階段だ。一段に両足を揃えてのぼる。玄関にたどり着いた時には汗だくになっていた。

ベッドの上で寝返りを打つと、腰に鋭い痛みが走った。ただベッドで寝ているのも辛いというのが、この二日間によく分かった。昨日の土曜は一日中ベッドで安静にしていた。今日もそうするつもりだったが、腰が痛くて寝ていられない。

ベッドから両足を下ろし、元気な方の足に体重をかけて立ち上がる。体の痛みは昨日に比べてずいぶんマシになっていた。明日からの仕事は何とかなりそうだ。ケガをしたのが金曜の仕事帰りで幸いだった。一日休めば、その分だけ収入が減る。

つたい歩きで部屋から台所に移動するだけで息が上がリ、シンクのふちを片手でつかんで立ったまま休憩する。麦茶を飲んだら、もうすることがなくなった。

この体の状態ではゲームセンターには行けないので、UFOキヤッチャーは諦めるし

かない。この二日間、電話も含めて誰とも会話していなかった。別にめずらしくもないことだったが、今、無性に誰かと話がしたかった。「菊ちゃん」に行ってみようか。たしか日曜も営業していると店長が言っていた。

行くための口実で悩んだ。おととい店で借りたタオルを返すのどうか。いや、ダメだ。血のついたタオルなんて、たとえ洗濯してきれいにしても、受け取る側は抵抗があるだろう。クローゼットの中を探してみたが、新品のタオルはなかった。別の口実を考えあぐね、ただ客として行くだけでいいのだと気づくまでに半日を要した。

スマホで店情報を検索してみたが、ヒットしない。おととい、仕事帰りにバイクとぶつかりそうになって転倒したのが夕方の五時半。店長は店に向かう途中だったとすると、開店は六時ごろか。時間が経つのが遅く感じられた。そのくせ、いざとなると決心が鈍って準備が遅れてしまい、外に出たときは六時をとうに回っていた。

階段はおりる方が大変だ。全体重が片足にかかる。後ろ向きに慎重におり、自転車を杖代わりにして歩く。自転車の前かがひひしゃげていたが、車輪は無事だった。買い替えずに済みそうだ。仕事に行くのに自転車は欠かせない。

店の前に橙色の暖簾がかかっているのを見て、ほっとしたのと同時に緊張した。引き戸を開けて中に入ると、「おお、川野さん」と奥の方から声がかかった。佐倉だ。他に客はいない。カウンターに手をつきながらテーブル席に到着し、佐倉の向かいに座った。「店長は……」と聞くと、「調味料を切らして、買いに行ってる。僕は留守番を頼まれて」とのことだった。

「足、大丈夫なの？」

佐倉が缶ビールを片手に聞いた。そばには駄菓子の空袋が二、三個、転がっている。

「はい、何とか。あの、おとといはお世話になりました。助かりました」

「いやいや」と佐倉は缶ビールを口に持っていきながら、空いている方の手を左右に振った。「川野さんも何か飲む？」

「いえ、普段は飲むんですが、今はちょっと。お酒は止めておこうかなと」

「ああ、そりゃそうだよね。ケガしてるし、歩くのも大変そうだもんね」

佐倉は立ち上がって店の出入り口の方に歩いて行き、ガラス張りの冷蔵庫からウーロン茶の瓶を一本取り出してカウンターの上に小銭を置き、テーブルに戻って由紀子の前に瓶を置いた。

「僕からのおごり」

「え、そんな。払います、私」

慌ててカバンから財布を取り出そうとすると、「いいから、いいから」と佐倉が身ぶりで制した。

何やらおいしそうな匂いが漂っている。UFOキャッチャー一回分のお金が浮いたし、せつかくだから何か食べていこうと思った。外食は久しぶりだ。

佐倉は無料の駄菓子をつまみに、缶ビール一本を少しずつ飲んでる。取り皿や箸は見当たらない。お金がないのにウーロン茶をおごってくれたのだろうか。

店の引き戸が勢いよく開き、「参った、参った」と言いながら入ってきたのは店長だった。

「いやあ、しょう油を切らすなんて店長失格だわ。留守番、サンキュウ」と佐倉に声をかけながらカウンターに入ろうとした店長が、由紀子に気づいた。

「あ、おとといの」

そう言うなり、すごい勢いでこちらに突進してきた。

「あのとき警察に通報しなかったよね。あとから気がついたんだけど」

店長がテーブルの縁をつかんで前のめりになるので、由紀子は思わず上体をのけぞらせた。距離が近い。

「まあまあ、菊ちゃん、ちよつと落ち着いて、座って話せば」

「佐倉がのんびりした口調で体を横にずらして席を空けると、店長は由紀子の正面に座った。うかつだったなあ、としきりにスキンヘッドをなでている。

「あ、でも、原付は走り去ったし、警察を呼んだところでどうしようもない……」

と由紀子がいかけると、佐倉が割って入った。

「いやいや、それでも警察には届けないと。こっちはケガしたんだから。急に飛び出してきたのは原付の方だし、原付と自転車じゃ、向こうに非があるに決まってるんだから
わ」

「はあ」

「はあ、じゃないよ、お姉さん」

今度は店長が割って入る。

「もつと怒らないと。そうやっておとなしく引っこむから、ああいう連中がますます世の中のにさばるんだ」

我がことのように怒る店長に親しみを覚えたのは一瞬だった。にわかには怒りの感情が湧き上がる。おとなしく引っこんだ？ あの状態で相手の男に何が言えたというのか。

危ないなあ。ちゃんと前を見て走れよ。耳にこびりついている原付男の声。どっちが！ そう言い返してやりたかった。頭の中でどれだけシミュレーションをしたか分からない。お前が飛び出してきたんだろうが！ 警察呼ぶから、待て。逃げるな！ ナンバープレート覚えたから、逃げても無駄！ すると男は観念したように原付バイクのエンジンを切り、由紀子のいる所までバイクを押し戻ってくる。ここでようやく溜飲が下がる。しかし、現実には原付男は振り向きもせず走り去った。こっちは地面に突っ伏したままで、ナンバープレートはおろか相手の顔すら覚えていない。そこでまた冒頭に戻って自動再生。おととい事故に遭った夜からずっと、このくり返しだ。

顔を上げると、店長は佐倉を相手に、別の話で盛り上がっていた。店長の若かりしこ

ろの武勇伝（捕まった仲間を助けるために警察署を取り囲んだらしい）が佳境に入ったところで客がひとり来て、店長は残念そうにカウンターに戻っていった。のんきな店である。

佐倉と二人きりになり、ふと聞いてみようと思いついた。

「あの」

遠慮がちに声をかけると、佐倉がこちらを見た。

「私の名前、どうして知っていたんですか」

「名前？」

「はい」

由紀子は部屋の前にも集合ポストにも表札を出していない。佐倉の返事を待ったが反応がない。

「自転車で転倒したとき、佐倉さんに名前を呼ばれました」

ああ、あの時か、と佐倉は思い出したようだ。しかし腕を組んで考えこむように目をつぶり、それきりだった。

数日後、仕事帰りに通勤ルートをそれて路地に入り、店の前を通ってみた。店長が外にいた。ほうきとちり取りを手に、表で掃き掃除をしている。夕日が店長の背中を照らして長い影を作っていた。声をかけようかどうしようかと迷いながら距離はどんどん縮まっていく。「あ、おかえり」と店長が顔をあげた。由紀子は思わず急ブレーキをかけ、つんのめるように自転車を止めた。

「もし時間あるなら、ちよつと寄っていきなよ」

「あ、でも。今、お金が厳しくて」

いくら値段が安いとはいえ、家で食べるよりは高くつく。店では酎ハイ一杯が三百円。家飲みだと百円を切る。

「今日、定休日なんだ。料理の試作をするから、飲み物以外は無料サービスするよ」

その飲み物代すら厳しいんですけど、とは言えず、促されるまま店の脇に自転車を停める。明日からしばらく、もやし炒めで乗りきるしかないな、などと考えながら中に入ると、奥のテーブルに先客がいた。佐倉だ。見ると、テーブルいっぱいには何が並べられている。近づいて由紀子は驚いた。

「どうしたんですか、これ」

声がうわずる。ダリアのグッズだった。ハンドタオル、ノート、クリアファイル、ボールペン、ペットボトルホルダー、Tシャツ、ジャム、レトルトカレー、【ダリアが首につけている花と同じ品種です】と書かれた花の種……。ダリアのイラスト入りの布マスクまである。最近、市のホームページで販売を開始し、申し込みが殺到して急ぎよ抽選販売に切り替えられた人気商品だ。なかなか手に入らず、由紀子も現物にお目にかか

るのは初めてだった。しかも、色違いのマスクが全色揃っている。

佐倉に促されてマスクをひとつ手に取った。布地にダリアのイラストが散りばめられている。遠目には水玉か小花の模様に見えるが、近くで見るとダリアの顔という控えめなデザインだ。これはいい。

「良かったら、ひとつどうぞ」

「えええ？」

絶叫に近い声が出てしまった。「い、いいんですか」

「もちろん」と佐倉がうなづく。

散々迷ったあげく、最初に手に取った藤色のマスクを選んだ。ダリアが首につけている花のダリアと同系色で、ネット販売でも真っ先に売り切れる一番人気の色だ。

「うちの娘にも一つもらっていいかな」

店長もそばにやって来た。

「どうぞ」と佐倉が言う。「良かったら奥さんの分も」

店長が家族用に残り全部あげる、と佐倉が言うので、由紀子は仰天した。

「こないだ親鸞聖人のカレンダーをもらったし。そのお礼だと思って受け取ってよ」

それはいくらなんでも、と遠慮する由紀子を見捨て、佐倉は全てのグッズを紙袋に入れ、ほら、と由紀子に渡した。

「佐倉さんとこは、たくさんあるもんね。また今度、川野さんに持ってきてあげたら」

「ぼかんとした由紀子に店長が言う。」

「佐倉さんは『ダリアの日記』の原作者なんだよ」

「ええ？」

「原作者じゃなくて、原案者」

佐倉が訂正する。

「どっちでもいいよ。とにかく佐倉さんが担当になってから、すごく人気が出たんだ」
「そ、それって、あのリニョールした日記の原作者？」

市のサイトで配信される『ダリアの日記』は、説教くさい内容から日常を描く内容に変わり、がぜん面白くなったのだ。

「原案者」と佐倉がまた訂正する。

「僕はアイデアを出しているだけ。それをアニメ作家が形にする」

「私、市役所に勤めているんです。ダリアの担当部署ではありませんが。まさか作者の方にお会いできるなんて……」

「だったら市役所で会っているかもしれないね。以前、打ち合わせで何度か役所に行っていたから」

聞けば、由紀子が「総合案内」に配属されていた時期と重なっていた。そうか、だか

ら佐倉は自分の名前を知っていたのだ。アポを取って役所に来る人は、必ず一階ロビーの総合案内に立ち寄る。内線で上階に来訪を告げ、来訪者には場所を案内するのが由紀子の仕事だ。案内係は制服の胸ポケットに名札を付けている。

一か月前の自転車事故の際、いきなり名前を呼ばれたことが引つかかっていたのだが、疑問が溶けてすっきりした。

佐倉が飲み物を取りに行っている間に、店長が小声で言った。

「佐倉さんは実家がお寺だから、顔が広くてね。そのアニメ作家さんも佐倉さんのお寺の檀家さんで、長い付き合いだね。それでダリアの日記を制作するのに、知恵を貸してほしいって佐倉さんに頼んできたんだよ」

急に声をひそめるのが気になって、話の内容が入ってこない。

「檀家じゃなくて、門徒って言うんだよ、浄土真宗では」

間近で佐倉の声がして、由紀子までつられて心臓が跳ねあがった。佐倉が困ったような顔をして立っている。

店長は「ごめん、ごめん」と言いながら慌てた様子で席を立ち、カウンターに戻っていった。佐倉は由紀子のななめ向かいに座り、小さくため息をついた。

「……お寺のカレンダー」

触れない方がいい話題なのだろうとは思ったが、佐倉が「ん？」という顔でこちらを見たので、言ってしまうと思った。

「実家が浄土真宗のお寺なら、親鸞のカレンダーなんか、いくらでも手に入るんじゃないですか？」

聖人、と尊称をつけるべきだったかな、と言ったあとで気になった。昔、親戚の寺に遊びに行つて、「しんらんって誰？」と大人たちに聞いたら、「呼び捨てにしてはダメ」と叱られたことを思い出したのだ。それに、佐倉が欲しがったカレンダーを「なんか」と言ってしまったのはまずかったか。佐倉は黙ったままだ。それでかえってスイッチが入った。

「うちの実家にも毎年、親戚のお寺からカレンダーが大量に送られてきて、母がさばくのに苦労しています。近所に配つたり、友達に配つたり。私にも三本がノルマだつて押しつけて。そんなに大変なら断ればいいのになんて言うんですけど、せつかく送ってくれるのに悪いでしょって。じゃあ配りきれない分は割りきって処分すればって言ったなら、そんな罰当たりなことできないって」

途中から何を言っているのか自分でも分からなくなってきた。黙って聞いていた佐倉の表情が緩んだ。

「その親戚の寺からすれば、川野さんのお母さんは非常に頼もしい存在だね」

「え？」

「寺のカレンダーをそれほど熱心に配ってくれるなんて、ありがたいことだよ」

「でも、うちの実家と親戚のお寺とは飛行機で行き来するぐらいの距離ですよ。お寺の名前と住所が印字されたカレンダーを遠く離れた土地で配ったところで、お寺の宣伝効果は期待できないと思うんですけど……」

「寺がカレンダーを作るのは、何も宣伝が目的というわけじゃないよ」

「え、そうなんですか」

「門徒やお世話になった人に対して、年末年始の挨拶を兼ねて配るものだから。浄土真宗の教えを知ってもらうためっていうのもある。カレンダーなら、もらう方も気軽に受け取れるし、邪魔にならないし。月ごとに親鸞の言葉を目にすれば、こういうことを言っている人がいたんだって知ってもらえるし。そもそも、親鸞が誰かなんて、みんな知らないから。だから、お母さんがご近所やお知り合いにカレンダーを配るのは、非常に理にかなっているわけ」

「そんなふう考えたことはなかったです」

カレンダーの言葉など、ろくに印象に残っていない。

「それに、川野さんのお母さんのおかげで、僕もカレンダーをもらえたわけだし」

「佐倉さんは実家からもらわないんですか？」

最初の質問に戻ってきた。

「僕のところは、カレンダーなんて作っていたかなあ。まあ、たとえ作っていたとしても、僕に回ってくることはないけれど」

「どうしてですか？」

「若いときに実家を出たからね」

それっきり、佐倉は缶ビールをじつと見つめて黙ってしまった。これ以上は聞けない。実家の住所はどこだろう。ダリアの生みの親であるアニメ作家は、確かこの市内の出身だ。ということ、佐倉の実家の寺も近いのではないか。

店の引き戸が勢いよく開き、「あれー、今日やってるの？」と入ってきたのは華奢な女性だった。頭頂部で茶髪をぐるぐる巻いて団子にし、耳には大振りのリングピアス、Tシャツに膝丈のデニムスカート、足元はスリッパのようなサンダル。ラフな格好なのに、だらしなくは見えない。センスがいいのだ。

女性は佐倉のとなり、つまり由紀子の向かいの席に座り、「暑い、暑い。もう限界」とマスクを外した。三十代前半くらいだろうか。豪快で社交的。由紀子の苦手なタイプだ。

「水曜って定休日じゃなかったの？」

「定休日だよ。だから仲間うちで飲んでいただけ」と店長。

仲間うち。自分もその中に含まれているのだろうか。だとしたら、何だかくすぐったい。

「ずるーい。私も誘ってくれたらいいのに。授乳中だから、お酒は飲めないけど」

「みゆきちゃん、久しぶりに来てくれたから一本目はサービス」

店長がウーロン茶の瓶を女性の前に置いた。「でも拓海くんもいるし、なかなか出歩けないでしょ？」

「この時間、仕事帰りにちよっとだけなら」

「お、ついに仕事に復帰したんだ？」

みゆきと呼ばれた女性はウーロン茶を一気に飲み干した。

「うん。今月からようやく拓海が保育園に通えるようになったから、先週から復帰したの。当面は時短勤務」

「だんなさんは？」

「だんなは今も在宅勤務。だから保育園のお迎えは、だんなの担当」

みゆきが片手でピースサインを作ってみせる。

「拓海くん、四月から最近まで、ずっと保育園に行けなかったのか」

みゆきと店長の会話を聞いていた佐倉が話に加わった。

「そうなの！」とみゆきが勢いこむ。

「四月にだんなが在宅勤務になったせいで、拓海を家で見てくれて園から言われちゃってさ。でも、だんな一人でゼロ歳児の面倒を見るなんて、無理に決まってるじゃない？だから私が育休を延長したの。四月から仕事に復帰するはずだったのに。この三か月、本っ当に大変だった。あれ、この話、前にもしたっけ」

店長と佐倉の反応を見て、みゆきが話を切った。

「いや、聞いたとしても三か月前だし、いま初めて聞かせてもらっているような気がするよ。どうぞ続けて」

佐倉が笑いをかみ殺して答えた。

目の前で自分を除いた全員で話が盛り上がっている。なかなか精神力を試されるシチュエーションだ。だからと言って、話の輪に加わりたくとも思わない。知らない人間の個人的な事情を聞かされても、だからどうした、という感じだ。そろそろお暇しようとして立ち上がりかけたそのとき、みゆきがウーロン茶の空瓶をテーブルにドンと置いた。「ほんとだったら家の近くの保育園に入れるはずだったのに。そこに通わせているママ友のなんでも在宅勤務だったんだけど、園に相談したら登園オツケーになったんだって。私だって相談したけどさ、お父さんが家にいるからって、あっさり却下」

「同じ市でも、保育園ごとで感染対策のやり方が違うんだねえ」

佐倉がのんびりした口調で答える。

「もとはといえば、あいつのせいよ。ほら、前に話したでしょ。市の子育て支援課の坪井加奈子。あいつのミスで、近くの保育園に入れなかったんだから」

由紀子は浮かしかけた腰を下ろした。

心臓が波打つ。ここで加奈子の名前が出るとは。今は子育て支援課にいるのか。由

紀子は誰に言うともなく「やっぱり、もう一杯だけ飲もうかな」とつぶやき、飲み物を取りに行った。

みゆきの話はこうだ。保育園は希望者が多いので点数制で入園の優先順位が決まる。保護者が仕事、病気などで「保育に欠ける」状況であればあるほど点数は高くなり、保育園に入りやすくなる。その計算を加奈子が間違えた。

みゆきは今年四月から仕事に復帰することが決まっていた、昨秋の申し込み時に窓口でそう伝えた。しかし、対応した加奈子はみゆきのことを専業主婦とだけ記入し、そのせいで本来もらえるはずの点数より低く出てしまった。フルタイム勤務のみゆきが落ちて、パート勤務のママ友が当選した。そのママ友とは他の条件（夫が会社勤めで、頼れる親族が近くにいないなど）が同じだったのでおかしいと思い、夫婦で役所の子育て支援課に出向いて訴えた。最初は取り合わなかった役所も、みゆき夫婦が入園判定会議の情報開示請求をするに至り、ようやくミスを認めたという。

これも前に聞かされた話なのか、店長と佐倉は余裕のある表情でうなずきながら聞いている。

「私ね、窓口で職員の名前を必ず確認するの。あとで問題になったとき、誰が対応したか分かるように。ほら、よくいるでしょ。首からぶら下げている名札を、わざと裏返して窓口に出てくる奴」

「いや、知らないけど、そうなの？」と店長が笑顔で首をかしげる。

「名前を見せてって言うよね、あ、気づかなかったって顔をして名札を表に返しやがんの。全く、しらじらしいったら」

由紀子は思わず吹き出した。

「え、何、何？」

みゆきが初めて、向かいに座る由紀子を真正面から見た。

「あ、そうだ。みゆきちゃん、この人、川野さん。最近、店に来てくれるお客さん」

今日がまだ三回目の来店で、しかもほとんどお金を使っていないというのに、店長の優しさが身に沁みる。

「由紀ちゃんって呼んでいい？」

フルネームを聞かれたあとで、みゆきが言った。初対面でいきなり下の名前で呼ばれるのは学生とき以来だ。年下の人間からいきなりタメ口を聞かれるのも新鮮だった。

「じゃあ俺も、由紀ちゃん、で」と店長が嬉しそうに言う。

「川野さんは市役所に勤めているんだよ。悪口もほどほどにね」

冗談めかして佐倉が言うのに、みゆきは心外だという顔をした。

「別に悪口じゃないわよ、これは。役所のミスのせいで、家から遠い保育園に入らされて、めちゃくちゃ生活に影響が出ているんだから。すみません、ですむ話じゃないって。

しかも、最初はミスを認めようとすらしなかったし。誰だって怒って当然でしょ」

みゆきの息子が通う保育園は、ミスを認めた役所が責任を取るかたちで市内の保育園を当たり、見つけてきたという。もう少し家から近い保育園はないのかと、みゆきが窓口で聞いたときの加奈子の返答がこうだ。

「こちらも苦勞して探して、どこも断られて、最後の望みでこの園に頼みこんで、何とか一枠、確保してもらったんです。役所として、できるかぎりのことはしました。ご理解ください」

「こんな言い方ってある？ みゆきは目をむいた。

「なにがご理解ください、よ。そっちのミスなんだから、動くのは当たり前でしょ。それを恩着せがましく、苦勞して探したのだの、何とか確保したのだの。それ、私に対して言うこと？ いったい何様のつもりよ、あいつ。正直、首を絞めてやろうかと思ったぐらい」

まるで耳に心地良い音楽を聴いているようだった。気がつけば、みゆきと二人きりになっていた。佐倉はカウンターの席に移動し、店長の料理を味見している。もつと聞いていたかったが、みゆきは「わ、もうこんな時間」と立ち上がった。

「帰って晚ごはんの用意をしなくちゃ。つい話しこんじゃった。由紀ちゃんって聞き上手ねえ。なんだかすっきりしたわ。ありがとう」

今度は由紀ちゃんの話聞かせてね、と言って、みゆきは由紀子に手を振った。

「これ、持っていきな。味見して、また感想、聞かせてよ」

店長から総菜の入った袋を渡され、みゆきは颯爽と帰って行った。

時計を見ると、午後六時を回ったところだった。店に来てから一時間も経っていない。楽しいときも、時間はゆっくり流れることを初めて知った。

それきり、みゆきを見かけなかった。店に来るたびにみゆきの姿がないことを確かめて、ほっとする自分がある。加奈子の話は楽しかったが、それ以外に話題がない。

奥のテーブル席に佐倉がひとりで座っている。カウンターには客が二、三人。ソーシャルディスタンス距離を難なくクリアしている。こんなに客が少なくて店の経営は大丈夫なのかと心配になるが、平日はランチもしていて、これが行列のできるほど盛況だという。

「もともと夜は客が少ないんだ。ビール好きは缶よりジョッキで飲みたいだろうし。食べ物メニューがないから食事メインの人もあんまり来ないし。そもそも小汚い店だから入りにくいし」と店長は言う。

そう思うのなら夜の客を増やす努力をすればいいのに、そうしないのが店長のいいところだ。テーブル席に座って間もなく、店長が大きなグラスでグレープフルーツ酎ハイを運んできた。ビールは缶なのに、酎ハイは店長の手作りである。「缶ビールと同じ料金で缶酎ハイを出したら、ぼったくりになるからさ」ということらしい。酎ハイはどの種類も果実の味が濃く、これで三百円は破格だ。佐倉は缶ビールをちびちび飲んでる。

「役所って、お盆も関係なく開いているよね。お盆休みはどうなってるの？」

缶ビールを片手に、小皿にあげた無料のピーナッツをつまみながら佐倉が聞く。

「三日間の休みを交代で取るんです。子どもがいる職員はお盆に合わせて休むので、私は九月に入ってから休みを取ろうかなと」

「じゃあ、お盆は仕事なんだ」

「はい、カレンダーどおりですね」

お盆直前の三連休に実家に帰ろうと思ったのだが、都会から地方に新幹線で移動した人が、降りた駅でチェックされているニュース見て、自重した。

「佐倉さんは？ お盆はどうされるんですか」

「いつもどおりだよ。特に何も無い」

店が休みの間、どうやって過ごすのだろう。寂しくないのだろうか。

「毎日が盆休みみたいなものだしなあ」

「何ですか、それ」

毎日が休み、というなら分かるが、休みの前に「盆」がつくのが何となく佐倉らしい。

「ああいう死に方がいいなあ」

こちらの質問には答えず、そんなことを言う。

「親鸞の、ですか」

今ではある程度、話の見当がつくようになった。ちなみに尊称をつけないことは、あらかじめ断りを入れている。佐倉にしても、親鸞とだけ言ったり、聖人をつけたりと呼び名が一定しない。そのときの気分なのだそうだ。実際のところ、佐倉がどの程度、浄土真宗の宗祖を敬愛しているのかは図りかねた。

「いや、お釈迦さんの方。ほら、沙羅双樹の下に横たわって、嘆き悲しむ大勢の弟子たちに見守られる中、安らかな顔で入滅するという……あれはいい」

「ああ、あれ。私も親戚のお寺で見たことがあります。お釈迦さんが一人だけやたら大きく描かれていて、手前にいる人間や動物が小さくて、子ども心に遠近法がおかしいと思いました」

佐倉が声をあげて笑った。料理を運んできた店長が驚いたように佐倉を見る。由紀子も同じ思いだった。寺にまつわる話を楽しそうにしている。これは過去のことを聞くチャンスではなからうか。

若いときに実家を出た。

以前、佐倉はそんなことを言った。これまでの会話で少しずつ出てきた話をつなぎ合わせると、佐倉は長男で、寺の跡継ぎとして期待されていたこと、十八歳で家を出たこと、寺は弟が継いだこと。分かっているのはそれぐらいだ。

佐倉が缶ビールをグラスに移し替えて飲み出した。これは腰を据えて飲むという合図だ。そして普段より雄弁になる。

「なぜお寺を継がなかったんですか」

思いきって聞いてみた。

「うーん、なんか縛られるというか、決められた人生を歩まされることに抵抗があったんだな、そのときは」

佐倉はグラスを見つめながら言った。宴会の乾杯で使われるような小さなグラスの泡は、もうほとんど消えかかっていた。

「それで弟さんがお寺を継がれたんですか」

「そう。弟とは昔から、そりが合わなくてね。別に嫌いだとかケンカをするとか、そういうわけじゃなかったけれど。お互いにこいつとは合わないって、早い段階から分かっていたと思う」

由紀子には妹がいる。仲は良い方だと思うが、佐倉の言うことも分かる気がした。

「でも、弟が寺を継いでくれたことは感謝してもきれない。親父もさぞ安心しただろうし。臨終のときも、親父は弟の手をこう握り返して——と、そこで佐倉はおもむろに箸を置き、自分の両手を組み合わせた。

「あとを頼むって。それが最期の言葉だったらしい」

「らし〜って。」

由紀子は、会ったこともない佐倉の父親の臨終の場面を思い浮かべていた。

「僕は臨終の場に立ち合っていない。とつくに家を出ていたから」

「あ、そうなんですね……」

もう少し話を聞きたかったが、「佐倉さん、用意できたよ」と店長から声がかかった。

カウンターのの上に、持ち帰り用の袋がいくつか並んでいる。

「あれ全部、テイクアウトするんですか？　すごい量ですね」

「うん、菊ちゃんの料理は家でも食べたくなるからね」

そう言って佐倉は支払いを済ませ、袋を両手に提げて帰って行った。

翌日の月曜は祝日だった。無駄に休みが多い。何もすることがなく暇である。天気だけは良い。久しぶりに布団を干そうと思ってベランダに続く窓を開けたら、鳩の死がいがあった。うずくまっっているだけと思いたかったが、両足を不自然に投げ出したまま動かない。すぐさま窓を閉めた。心臓が早鐘のように打ち始める。落ち着け、落ち着け、と自分に言い聞かせながら、檻の中の動物のように部屋の中を行ったり来たりした。

午前はベランダから一番遠い壁ぎわでなるべく過ぎ、部屋を横切るときは早足に合った。午後、ランチが終わる頃合いを見計らって店に行ってみたが、暖簾が出ていない。祝日はランチが休みだった。

家に帰る気にならず、駅前のファミレスで時間をつぶすことにした。スマホで動物の死骸の処理について検索する。無料で市役所が引き取りに来てくれるらしい。自分も役

所に勤める身だが、そういう部署があるとは知らなかった。犬や猫でなくても来てくれるのだろうか。どのみち今日は祝日だから役所は休みだ。匂いは、しなかった。ベランダの窓を開けたかぎりでは。しかし、この猛暑である。今まさに西日にあぶられる鳩の姿を想像して、由紀子は思わず身震いした。何か別のことを考えよう。スマホでダリアの日記の閲覧回数をチェックする。

相変わらずの人氣ぶりだった。プライドが高く、我が道を行く表向きのキャラと、そのイメージを維持しようとして虚勢を張り、やせ我慢をし、ひとり悶々と悩む内向きのキャラとのギャップがいい。ダリアの生みの親が佐倉だと知ってからは、面白さも倍増した。夕方六時前まで店で粘った。ドリンクバーをおかわりしすぎて胃が重たい。

開店前だが、予想通り店は開いていた。

引き戸を開けるなり「あれー、由紀ちゃん、久しぶり」という明るい声に迎えられた。カウンター席でジョッキ片手にみゆきが笑っている。相変わらずテンションが高い。そばにウーロン茶の空き瓶があった。カウンターの中から店長が肩越しに振り返り、「らっしやい。今日は早いね」と笑った。

「……みゆきちゃん、久しぶり」

カウンターの席に寄りかかる。

「やだ、どうしたの。具合悪そう」

「鳩が……」

そこで慌てて口をつぐんだ。壁ぎわの調理台で店長がさばいているのはまさに鶏肉の塊だった。

「ハト？」

何でもない、というふうに首を振った。みゆきだって女性だから苦手かもしれない。佐倉がいてくれれば、と思つたら、引き戸がガラガラと開いて入ってきたのは当の本人だった。

「え、何、どうしたの」

由紀子の顔を見て、佐倉が驚いたように入り口で立ち止まった。

「ベランダに鳩がいるんです」

自分は泣きそうな顔をしているに違いない。実際、目には涙がにじんでいた。

「鳩？」

「ちよっと手伝ってもらえませんか。一生のお願いです」

「どういふこと？」

店長は切り分けた鶏肉を串に刺しているところだ。ここでは話せない。由紀子は席を立てて表に出た。佐倉がついてくる。店の外で事情を話した。

「いいよ。それぐらい、お安い御用だ」

「ほんとですか。助かります……」

安堵で声が震えた。

「でも、レイデイのお宅に男がこのこ入るのは、ちょっとね」と言うなり佐倉は店に戻り、すぐにみゆきを伴って出てきた。「今、実家の母親が来てくれてるから、時間、少しだけなら大丈夫だけど？」とみゆきと言う。

店の前で佐倉から話を聞かされたみゆきは「げ、キモ……。そういうの苦手なんだけど」と顔をしかめつつ、「それならそうと、由紀ちゃん、さつき店に来たときに言ってくればいいのに」と口を尖らせた。

「店では話しくかつたんだよね。菊ちゃんに悪いし」

由紀子は激しくうなずいた。自分の気持ちを佐倉が代弁してくれている。

「菊ちゃん、すぐ戻るから」と佐倉が店の中に向かって声をかけ、三人でアパートに向かう。

それからの佐倉の動きは全く無駄がなかった。由紀子にタオルと段ボールの箱を用意させ、タオルを鳩に被せて抱きあげて段ボールに入れた。それから三人で近くの公園に行き、柔らかそうな地面を探して土を掘り、その土の穴に鳩を置き、タオルだけ外して土を被せた。みゆきは神妙な顔つきで作業を見守っていたが、由紀子は鳩の姿を正視できなかつた。最後に佐倉は両手を合わせ、「南無阿弥陀仏」とつぶやいた。由紀子とみゆきも手を合わせた。

「佐倉さんって、本物のお坊さんみたい」

みゆきの言葉に佐倉は苦笑いした。

公園から店に戻る途中でアパートの前を通った。佐倉が「先に行つて。これ、家に置いてくるから」と言つて、アパートの方に足を向けた。直接、鳩に触れた段ボール箱やタオルを由紀子の部屋に戻すのは避けようという配慮だ。ありがたい。

「あれ？」と声が出た。

「どうしたの、由紀ちゃん」

「ううん、何でもない」

佐倉がアパートの外階段の前を通り過ぎたのだ。二階に上がらないのだろうか。

店に戻つて、みゆきは支払いを済ませて帰っていった。カウンターで佐倉と飲んだ。由紀子はいつもの酎ハイ、佐倉は缶ビールだ。焼き鳥は佐倉の分だけにしてもらい、おまかせで料理を出してもらおう。今日のお礼におごるつもりだった。予想通り、佐倉は拒否した。

「じゃあ、これきりにしますから、今日はおごらせてください。本当に助かったので」

「あれぐらいで。それに女性におごってもらうなんて」

「そんなこと気にするんですか」

「給料が安くて、生活が厳しいって言つてなかつた？」

「失礼な。給付金が出たので大丈夫です」

「それなら僕だって出たよ、十万円」

「そんなやりとりの末、最後には佐倉が折れた。」

「今日は大変だったねえ。由紀ちゃん、真っ青な顔で店に飛びこんできたから何事かと思つたよ」と店長。結局、みゆきが一部始終をしゃべつたのだ。そんなこと気にしなくていいのに、と網の上で焼き鳥の串をくるくる回しながら店長は豪快に笑う。

「ばんばん焼いちやうよ。今日は新鮮な地鶏が入つたんだ」

「どおりで。これ、めちやくちやうまいや」

ねぎまの串を頬張つた佐倉が目を見開いた。

「でしょ？ 今朝方まで太陽を浴びて飛び回っていたやつだから。あ、空は飛ばないけどね。ところが特におすすめ」

「じゃあ、それ、もらおう」

「もみじの唐揚げもできるよ。由紀ちゃんもどう？ ゼラチンたつぷり」

「もみじって？」

「鶏の足」

店長が両手の指をめいっばい広げてみせ、由紀子は酎ハイでむせた。

佐倉があまりにおいしそうに食べるので、由紀子も焼き鳥を注文した。頭の中から鳩の残像を追い払い、意識を舌に集中させると思つたより平気である。他に客がいないせいか、ゆつたりした濃密な時間が流れていた。

「今日は弟さんの命日だね」

会話が途切れたタイミングで店長がつぶやいた。

「これは僕からのおごり。弟さんを偲んで」

佐倉の前に缶ビールが置かれた。

「グラス、もう一個」

ややあつて佐倉が口を開いた。それから二つのグラスにビールを注ぎ、一つをカウンター越しに店長に渡す。「献杯」と店長がつぶやき、二人でグラスを掲げた。由紀子は酎ハイのグラスを握りしめたまま固まっていた。

「今日、弟の命日なんだ」

佐倉が由紀子の顔をまっすぐ見て言った。

「弟さん、亡くなられたんですか」

「うん、もうずいぶん前。僕の知らない間にね」

「え」

「寺の息子が家を出るって、そういうことなんだ」

「……」

「はい、由紀ちゃんにも一杯サービス」

店長からグレイプフルーツ酎ハイを受け取り、ひとくち飲む。いつもより果物の味が

濃い。また黙りこんで飲むだけかと思ったら、佐倉がぼつぼつと語り始めた。

佐倉は高校卒業と同時に家を出て、弟が実家の寺を継いだ。その後、父が長く患った末に亡くなった。弟夫婦には子どもがおらず、養子を迎える話が浮上したところ、弟が心臓発作で急死した。四十歳だった。弟の妻は寺を出ざるをえなかった。佐倉の母は高齢者施設に入ることになった。門徒の一人が佐倉の連絡先を調べ、そういう状況になっていることを知らせてきた。佐倉には娘がひとりいた。その門徒は、佐倉の娘を寺に迎えて婿養子をとってもらいたいと懇願した。そうしなければ寺が人手に渡ってしまうというのだ。妻が娘を連れて出ていったことを伝えると、相手は落胆した。その後、妻とは正式に離婚した。

「娘さんとは？」

「もう三十年、会っていない」

出ていったときに十歳だったということは、由紀子とほぼ同年齢だ。元妻と娘、そして佐倉の母はその後どうなったのか。佐倉の横顔をうかがう。聞けなかった。

「お寺を継がなかったのは、他に何かしたいことがあったんですか？」

質問を変えてみた。

「いや、特に何も。当時はあったかもしれないけれど、今となっては思い出せない」

また缶ビールをグラスに注ぐ。

「ただ、社会に出たいとは思ったね。この世の仕組みがどうなっているのか。自分がどう生きるべきか。何をなすべきか。それを見極めたいと強烈に思っていた」

「若いときってそうだよね」

と、それまで気配を消していた店長が同調する。

「実家の寺にいたら、それができないかと思ったんだ。自分は世間と言うものを知らない。同世代の奴らに後れを取っている。その焦燥感といったら。もう居ても立ってもいられなくてね」

「はい」

「実際、あのまま、すんなり寺を継いでいたら、僕は外の世界への思いを断ち切れずに、そのうち絶対におかしくなっていたはずだ。だから、十八で家を出たのは間違った判断ではなかったと、今でも思う」

「はい」

「でも、だったら正しい判断だったのかと問われれば、自信はない」

佐倉がカウンターの上で両手を軽く握りしめた。

「今になって、果たしてあのとき、自分の行動は間違っていないかだったのか、寺の住職を継いで、住職の立場から社会に発信することもできたのではないか、という思いが拭えないんだ。考え出すと夜も眠れない。もし、弟が生きていて養子を迎えていれば、こんなふうに思いわずらうこともなかったんだろうけど。だから全ては結果論なんだ。後か

らこうすれば良かった、ああすれば良かったなんて考えることほど無駄なことはない。頭では分かっているんだけど」

「はい」

声がかすれた。佐倉はそれきり口をつぐんで、店長はテーブル席の常連客から声がかかり、一緒に飲み出した。

「私の話もしていいですか」

今なら話せる。ずっと誰かに聞いてもらいたかった。親にも友達にも話していないことを。

「私も結婚していたことがあります。子どもはいませんでした」

何をどこまで話すか迷ったが、とりあえず話しながら考えることにする。

二十代の後半だった。相手は事務用品を扱う会社の同僚だった。同期入社は六人、うち男女が三人ずつ。このメンバーでよく飲みに行った。集団行動は苦手だったが、お酒のおいしさに目覚め、場を白けさせない程度の会話ができるようになったころ、自分以外の二組の男女が恋人どうしになり、じゃあ自分たちも、という感じで付き合い始めたのが、のちの夫だった。仕事ぶりが真面目で優しくかったのと、背が高いというのが付き合う決め手になった。二十八で結婚した。好きな人と一緒になれたというより、自分も人並みに結婚できたという安堵感が強かった。結婚前の家族どうしの会食で、隣に座った妹が「なんか人畜無害って感じ？ でも、いい人そうじゃん」と耳打ちしてきた。

結婚して半年が経ったころ、夫の浮気が分かった。夫から性病をうつされたのだ（さすがに、このくだりは佐倉の前では割愛した）。最初は自分の体に何が起こったのか分からなかった。日を追うごとに下腹部の痛みが強くなり、分泌物が異常に多くなった。婦人科に駆けこんで検査を受け、抗生剤を処方された。幸い、症状はすぐに改善したが、婦人科医から「ご主人ときちんと話をして。ご主人も必ず治療しないとダメよ」と何度も念を押された。この患者には夫婦で向き合う覚悟がなさそうに見えたのだろう。医者の懸念は、半分は当たり、半分は外れた。由紀子は夫に話をした。しかし、夫は治療をしなかった。病気を認めなかったのだ。

夫はしばらく黙りこんだあと、「オレのせいって言うのか？」と口を歪ませた。今まで見たこともない顔だった。交際二年半、入社当時から数えると五年。それだけ付き合いが長ければ、相手がどういう人間か分かりそうなものだ。豹変した夫を目の前に、由紀子は笑い出しそうになるのを堪えるのに必死だった。

「お前のせいかもしれないだろ」と夫は耳を疑うようなことを言った。「お前、オレ以外の男とやってないって、百パーセント言いきれるのか？」「言いきれるよ」と由紀子が答えると、「口では何とでも言えるよな」と夫は嫌な笑い方をした。「そっちはどうなのよ。自分のせいじゃないって、私以外の人とはしてないって言いきれるの？」

これに夫は逆上した。「そっちがって言うな！」「だんなに向かってそっちがって

何だ。どういふことだよ。お前、オレをバカにしてんのか」え、そっち（の話）？と驚いた由紀子に対して、夫はさらに逆上した。「さつき言ったよな。『そっち』って言ったくせに、とぼけるなよ。自分の発言に責任持てよ」いや、そっちよりこっち（あんなの浮気）の話でしょっていう意味で言ったんだけど、という由紀子の話を夫は全く聞いていなかった。

「あ、もういい。分かった」由紀子がこめかみを押さえながら言うと、「ああ？ どういうことだよ。自分から話を振ってって、もういいって何だよ。お前、やっぱオレをバカにしてんだろ。だいたい最初からお前は」とますますヒートアップするので、由紀子は夫がこのまま憤死してしまうのではないかと本気で心配した。

結婚生活は一年弱であえなく終わりを告げた。夫は離婚には素直に応じた。身に覚えが当然あっただろうし、妻に借りをつくって結婚生活を続行するなんてプライドが許さなかっただろうから、話し合いと手続きは滞りなく進んだ。夫の浮気について、由紀子は両親に言わなかった。もちろん夫の両親にも。母親にだけは言うべきだったかな、と今になって思うのは、母親が由紀子のことを、自己中心的な人間だと評価しているふしがあるからだ。簡単に離婚しちゃって、と今でも娘を責める。彼女が心配するのは、娘がいい年をして不安定な生活を続けていることよりも、そのような結果を自ら招いた娘の人格や行動そのものなのだ。

離婚して良かったと思う。あのまま結婚生活を続けることは不可能だった。ところが最近、別の感情が生まれ、由紀子は大いに困惑している。

あのとき、夫ときちんと話し合えばよかった。そんな考えが浮かぶのだ。独身に戻って過ごした三十代、結婚生活を思い返すたびに、さっさと別れてよかった、自分は本当に男を見る目がなかったけれど、と胸をなでおろしたものだ。まさか、今になって夫に寄り添えなかったと自分を責めることになるとは思ってもしなかった。

あのときの夫は病的だった。それを分かっているながら自分は切って捨てた。たとえ離婚という結末は一緒だったにせよ、もう少し本気で向き合うべきだった。なんで浮気したのよ、と泣いて抗議するべきだった。夫のことを愛していないのは自分の方だったのではないか。

ささいなことでも自分を責めた。そもそも浮気の話の切り出し方がまずかったのではないか。夫は気が弱そうに見えて、実はプライドが高いということは前から分かっていたのに、単刀直入に言いすぎた。もし、当時の由紀子が目の前に現れたら、あり得ない、と怒るに違いない。いくら今が一人で寂しいからって、過去の記憶をすり替えるんじゃないよ！ などと言うかもしれない。

もし当時に戻っても、やはり同じ行動を選択するだろう。あの男と話し合うなんてとんでもない、と思うだろう。なのに、過去の記憶を混ぜ返し、別の見方をし、もっとうすればよかった、ああすればよかったと考え出すと止まらない。後悔の念が波のよう

に押し寄せ、心の防波堤をやすやすと超え、あつという間に由紀子の全身をのみこんでいく。

「そうだったら身動きが取れなくなるんです。何をしても、突然、体と頭がフリーズして」

例えばこんなふうには、と由紀子は口元に持っていきかけた小皿と箸を宙に浮かせたまま、両手の動きを止めた。

「ほう」と佐倉が言った。「で、どうするの、それ」

「波がおさまるのを待つんです、この状態のまま」

時間になればほんの二、三秒のことだが、多いときは一日に何度かこういうふうになる。要するに時間が有り余っているのだ。もし自分に家庭があつたなら、と考える。育児や家事、仕事に追われて、怒涛のような日々を送っていたに違いない。もはや化石となった大昔の記憶を掘り起こして手のひらにのせ、ためつすがめつ眺める暇などないはずだ。離婚してから恋人がいた時期もあるが、一人でいるより楽しいと思えず、結局一人で生きてきて、今、その孤独に耐えられなくなっている。

「腕がつりそう」と佐倉は素っ気ない態度である。

「たしかに。……ていうか、もう少し、他に言うことありません？」

由紀子は両手をおろして、大げさにため息をついた。

「これから先、ずっとこんな感じなのかなあ。だとしたらしんどいです、正直」

酎ハイに口につける。氷が溶けて果実の味が薄まっていた。

「たぶんね。ずっと続くよ。そのしんどさ」

佐倉はいつの間にかビールからウーロン茶にシフトしている。

「そんな身も蓋もないことを」

「そのうち慣れるよ」

「慣れませんか。離婚して十年以上、いまだに慣れませんから」

「うん、僕も時間がかかった」

「三十年？」

「いや、そこまでは。でも、昔のことを思い出して、夜、眠れないことは今でもある。急に大声で叫び出しそうになったり、絶望的な気持ちになったり。でも、それは誰にもあることですよ。結婚していようが子どもがいようが、人それぞれ、それなりに」

「だから、私もそう思えるようになりたいっていう話です」

「〃それもそうだね〃」佐倉が裏声で棒読みした。

「何ですか、いきなり」

「ダリアの口ぐせ」

「もしかしてダリアの声色のつもりですか。全然、似ていませんよ」

「〃それもそうだね〃」

「はいはい」

なんだかどうでもよくなってきた。「はい、お待ち」と店長がカウンター越しに小鉢を置く。「レタスと夏みかんのマリネ。箸休めにどうぞ」

硬いものが食べにくい年配の客のために、店長はメニューに工夫を凝らしている。マリネにも定番のタコは使わない。

「うん、これはうまい」佐倉がうなずく。

「ほんとだ。夏みかんとお酢ってすごく合いますね」

「穴子の天ぷら、できるけど」

「いただきます」由紀子は即答した。

「デザートもあるから、おなか空けといてね」と店長。

思いがけず充実した夜となった。店の盆休みの期間にどうしようもなく寂しくなったら、今夜のことを思い出そう。鳩のお墓に墓標を立ててやれば良かったなと思った。

夜通しエアコンを点けっぱなしにしているせいか体がだるかった。かといって冷房なしでは耐えられない暑さが連日連夜、続いている。

ゴミ置き場に向かう途中、間違えてペットボトルを入れた袋を持ってきたことに気づいた。今日は「ビンと缶」の日だ。思わず舌打ちする。急がないとラジオ体操の時間間に合わない。アパートに引き返して外階段をあがりかけたとき、二階の由紀子の部屋のドアが開き、中から人が出てきた。

佐倉だった。

何が起こっているのか分からなかった。

呆然と見上げていると向こうもこちらに気づいた。周りの音が遠のき、目の前の景色がやけにくつきり見えていた。視界の端を野良猫が横切った。

ひどくゆっくりした足取りで佐倉が階段をおりてくる。由紀子はじりじりと後ずさりし、佐倉が階段をおりきったときには、階段の手すりの後ろに隠れるようにして立っていた。

今日のラジオ体操は諦めなければ。頭の片隅でつぶやく声があった。出勤時間にはまだ余裕がある。大丈夫、大丈夫。

こめかみに汗が浮く。今日も暑い一日になるに違いなかった。

佐倉は押し黙ったままひと言もしゃべらない。この人は誰だろうと思った。週に一度か二度、「菊ちゃん」で一緒に飲んでいたあの佐倉だろうか。

「それがほしかったんですか」

佐倉はダリアのぬいぐるみを手にしていた。

「……いっぱい持っているじゃないですか、ダリアのグッズ」

原案者のくせに、という言葉はのみこんだ。黙っていられたら何も分からない。階段

の手すりを両手で握りしめる。

「いつからですか」

「え？」と佐倉が初めて顔をあげた。

「いつから、こういうことをしていたんですか」

今朝はゴミ置き場に行く途中で引き返したから、たまたま分かった。これが初めてではないのではないか。

「誤解なんだ」

消え入りそうな声だった。

「誤解？」

突然、自転車の事故のことを思い出した。名前。あのとき名前を呼ばれた。市役所の総合案内で顔を合わせていたとしても、それだけで名前と顔を覚えるわけがない。部屋に侵入していたから名前を知っていたのだ。階段の手すりに額を当てて由紀子はうめいた。錆びた鉄の匂いが鼻についた。

「なんで」声に出すと泣きそうになった。ダメだ。ここで泣いたらダメ。目を閉じて、階段の手すりをつかむ両手に力をこめる。

顔を上げると佐倉と目が合った。自分から目をそらすことは絶対にしないで、と思った。

「人の家に勝手にあがりこんで、一体どういうつもりですか。何が目的ですか」

突然、「すまん！」と佐倉が勢いよく頭を下げた。

「本当にすまん。もう二度としなから」

ダリアを下に置いて逃げるように去っていく佐倉を、由紀子は呆然と見送った。手すりに寄りかかるようにして、のろのろと階段をあがる。そうしないと後ろ向きに倒れそうだった。

自分の部屋に入るのに勇気がいった。ドアノブに触れるのさえためられる。ドアの前で立ちつくす。バカじゃないの、と声がした。自分の声だと気づくのに少し時間がかかった。バカじゃないの、ほんとに。簡単に人を信じちゃって。次の瞬間、乱暴にドアノブを回していた。触れたとき、背すじに悪寒が走った。すぐに手を洗おう。ドアノブも念入りに消毒しなければ。家の中も全部。ビニール袋を持って廊下に出る。階段を駆けおり、一番下の段に背中を預けているダリアをビニール袋で包んで部屋に連れて帰った。

その日は午後から早退した。ドラッグストアでアルコール除菌スプレーやら除菌シートやらを大量に買い込んで帰宅し、部屋中を拭き、家具や物を消毒して回った。もちろんダリアも。もし同居家族に新型ウイルスの感染者が出たらこんな感じなのかもしれないと思いつながら、とにかく掃除しまくった。

「菊ちゃん」には行かなくなった。その代わり、駅から近いスーパーにまた行くように

なった。レジの前に二十四缶入りのビールが積まれていた。よく見る銘柄だ。レジの長い列に並んでいる間、体の向きを変えて目に入らないようにした。

日曜の午後、ゲームセンターにいた。いつものUFOキャッチャーの前で、いつものようにアクリル板で区切られた箱の中だけに意識を集中させる。ダリアのぬいぐるみにどうしても目がいくのは仕方がない。人の気配がして横を向くと、みゆきだった。マスクをしているので一瞬、誰だか分からなかった。

「すごいね、由紀ちゃん。全然、気づかないんだもん」

「いつから？」

「三十分前ぐらい」

「そんなに？」驚いて聞くと、「うそうそ、五分ぐらいかな」とみゆきは笑った。それでも長い。

「由紀ちゃん、最近、店に来ないから店長が心配してさ。様子を見て来いって」

そういえばUFOキャッチャーが唯一の趣味だということを、店長には話したことがあった。できれば、みゆきには知られたくなかった。

「また店に来てよ」とみゆきが言う。「佐倉さんもいなくて、店長が寂しそうですか」

思わず顔をあげる。

「あ、佐倉さん、こないだから入院しているのよ。心臓が良くないらしくて」

「へえ」

かなり悪いのだろうか。

「明日、『菊ちゃん』の開店十周年の記念日なの。特別に何かするわけじゃないって店長は言っていたけど、顔だけ出そうと思って。由紀ちゃんも来てよ」

なじみ客ばかりの集まりに参加するのは気が進まなかった。が、そうも言えず、由紀子はあいまいに笑うにとどめた。

結局、翌日の仕事帰りに「菊ちゃん」に来ていた。カウンターの端の席でグレープフルーツ酎ハイを注文する。みゆきの姿はない。顔だけ出すと言っていたが、入れ違いになったのだろうか。だったら来る意味がなかったな、と思いつながら店内を見渡すと、ほとんどが一人客だった。周りとお話するでもなく、みな一人で黙々と飲んでいる。もとところという店だったな、と由紀子は安堵した。

テーブルの佐倉がいつも座っていた席には、別のおじさんが座っていた。一人で飲むのは不思議な感じだった。それが徐々に寂しさに置き換わるころ、みゆきが家族をともなつて店に顔を出した。

みゆきは一歳になる息子を抱っこし、来年、小学校にあがる上の娘は、みゆきの母に手を引かれている。遠方に住むみゆきの母が、仕事の夏季休暇を利用して泊まりにきて

いるらしい。今年の夏は、大人は休みを取り、子どもは学校に行くという不思議な現象が起きている。由紀子が女の子に「こんにちは」と挨拶すると、恥ずかしそうに祖母の後ろに隠れてしまった。

奥のテーブルにごちそうが並び、上の子が歓声をあげた。食べ終わったところにみゆきの夫が来店し、眠っている息子をベビーカーにのせ、上の娘と義母と一緒に先に帰った。みゆきは「せつかくだから、もう少しだけ」と店に残った。みゆきと並んでカウンターに座る。店長もみゆきも、由紀子がしばらく店に顔を出さなかった理由を聞かない。それがありがたくもあり、寂しくもあった。

みゆきが四十の手前と聞いて驚いた。とてもそうは見えない。

「由紀ちゃんだって若いよ。初めて会ったとき、年下かと思ったもの。だから、由紀ちゃん」。年上だと分かっていたら、由紀子さんと呼んでいたよ」

子どもが二人いるのも、ついさつき知ったばかりだ。名前を漢字で「深雪」と書くのも知らなかった。結婚して子どもがいて仕事もしている。夫も優しそうな人だった。

「由紀ちゃんってさ、今、付き合っている人っているの？」

聞かれて首を横に振る。この手の質問は、されるのも久しぶりなら、正直に答えるのも久しぶりだ。この年齢になると、周りから聞かれることもない。聞かれるのは嫌なくせに、聞かれなければ寂しいのだから我ながら厄介だ。

「じゃあさ、人生で初めて彼氏ができたのって、いつ？」

深雪が質問を変えてきた。

「高校二年、かな」

「おお！王道。青春」

「何、王道って。意味不明」

「いいから聞かせてよ。相手、どんな人？」

そんな目を輝かせて聞くような話ではない。期待外れだと思うよ、と前置きして話をした。

高校生のとき、部活帰りに一人で帰るのが嫌で、告白してきた陸上部の男子にオツケの返事をした。告白されるまで、その男子の存在は知らなかった。

ハンドボール部に所属していた由紀子は、陸上部と同じグラウンドで毎日練習していた。グラウンドの照明が落ちたら強制的に練習終了となるので、屋外で活動する運動部は、帰る時間がだいたい同じになる。身長は百八センチあるし（十センチヒールの靴を履いても、相手の方がまだ高いというのが由紀子の理想だ）、顔はともかく体型がカッコよかった。家の方向が一緒だった。電車を乗り継いで一時間。一人で帰らずにすむ。並んで歩く姿を想像した。うん、悪くない。付き合おう。そんな感じだ。

電車通学をしている運動部の生徒は、下校時、同じ部員たちで群れるか、練習が終わるのを待っていた彼氏もしくは彼女と一緒にカップルで帰るかのどちらかだった。個人

競技ではなく団体競技の運動部に入ったのは、苦手な集団行動に慣れたいという思いがあったからだ。結局ダメだった。同調性を求められることに耐えられず、帰りはいつも一人だった。せめて彼氏がいれば格好がつくのに、と思っていたところ、タイミンがよく告白されたというわけだ。付き合うきっかけなんてそんなものだと思って当時の親友に話したら、ドン引きされた。あんたは人間として大切な何かが欠けている、と親友に大真面目な顔で言われたことを、由紀子はけっこう長い間、引きずった。

彼氏からは「俺のこと、ほんとに好きなの？」とよく聞かれた。もちろん、と答えた。

「由紀って一人でも生きていけるタイプだよな」とも言った。どこかおもしろがっているようにも見えた。高校卒業まで付き合ってた、それなりのことを順当に経験し、それなりに楽しかった。何より一緒にいて楽しかった。ものすごく好きというわけではなかったけれど、付き合っているうちに自然と情が湧いた。「情ってなんだよ」と彼はすねた。「愛情の情だよ」と言うと、「ウソだろ、それ」と笑った。その笑顔を愛しいと思ったのはウソではない。何より、この人は私のことが好きなのだという事実が由紀子を支えた。

「はい、お待ち」と店長が由紀子の前に料理の皿を置いていく。記念日といっても特別な料理ではなく、普段どおりの料理を出す姿勢が好ましい。茄子の煮びたし、イワシの蒲焼き、豚の角煮……どれもこれも口に合う。これでなぜ店が流行らないのか不思議だ。「でもさあ、由紀ちゃんの恋愛って、ちょっと打算的だよな」

深雪がグラスの水をカラカラと回しながら言う。中身はもちろんソフトドリンクだ。ビール好きの彼女は、授乳中も飲む気分だけは味わいたいかで、瓶のウーロン茶をわざわざジョッキに移し替えているのだ。ノンアルコールビールなどというオシャレなものはこの店にはない。

「一人で帰るのがカッコ悪いからって、好きでもない人と付き合うなんて、それってどうなの」

「親友にも同じことを言われた」

過去に結婚していたことは話さないでおこうと決めた。余計に引かれてしまう。

「由紀ちゃんって、人との間に壁があるよね。人見知りというのとは違って」

「そうかもしれない」

「あら、素直に認めるんだ」

「だって本当のことだもの。仕方ないでしょ」

深雪みたいに誰とでも分け隔てなく話ができれば苦労はしない。

「ふうん。ちょっと酔った？」

「酔っていないけども、私はいつもこういうの」

「タガが外れそうだった」

「そろそろ帰ろっか。由紀ちゃん、明日も仕事でしょ。私も帰らないと」

その言葉に救われて立ち上がると、カウンターの中でせわしなく動き回っていた店長が振り返った。

「由紀ちゃん、ちょっと待って。渡したいものがあるから。持ち帰りのおかず」「え？」

「今、ちょうど作りかけのやつがあるんだ。由紀ちゃんの好物。もうちょっとだけ待ってくれる？」

「え、でも、もうたくさん食べたし、おなかいっぱい……」

深雪が由紀子の腕を軽くつかんだ。

「いいじゃん、せっかくだから。店長のテイクアウト、最高だよ。私もしょっちゅう家族の分までいただいて、いつもありがとうございます」と、深雪は店長に向かって頭を下げると、カウンターに万札を二枚置いて出て行った。

「おおい、ちよつと、多すぎるよ、これ」

店長がお金をつかんで追いかける。

「だんなからも言われているから、受け取って。いつもお世話になってるし、今日は家族で来させてもらったし。十周年のお祝いもかねて。ささやかだけど」

店の外から深雪の声が聞こえてくる。

「参ったなあ、もう」と頭をかきながら戻ってきた店長が、由紀子を見たときとたん真顔になった。

「ごめん、実は何も作ってないんだ。由紀ちゃんを引き止めるための、とっさのウソ」

「はあ」

「このあと、佐倉さんが来るんだ」

「え……」

「先週、病院に見舞いに行ったとき、由紀ちゃんのこと、佐倉さんから聞いたよ」

手はせわしなく動かしながら、口調は穏やかに店長が言う。佐倉は昨日、退院したらしい。入院した理由は熱中症だという。

そろそろ来るころだと言われてから一時間、待っても来ない。客もまばらになってきた。夜八時すぎ、ずっと緊張しっぱなしで精神がもたなくなり、もう帰ろうと店の引き戸を開けたら佐倉が立っていた。街灯に照らされてピンクの上着がぼんやり浮かんでいる。互いにその場でかたまった。突然、佐倉が背中を向けて歩き出した。

「佐倉さん」と叫んでいた。

店長が店の外に飛び出してきた。

快気祝いと称してスパークリング清酒の栓が抜かれた。三人でテーブルをコの字型に囲み、真ん中に由紀子が座った。さつきから店長が一人でしゃべっている。開店三周年祝いにランチの常連客から贈られたという甘い清酒は口当たりが良かったが、別のとき

に飲みたかった。今はとても味わう気分でない。佐倉も出された缶ビールに手をつけることなく、テーブルの一点を見つめている。

「あのとき、誤解だって言いましたよね。それって、どういうことですか」

いつまでたっても話が始まりそうにないので、しびれを切らして口火を切った。佐倉が顔を上げた。

「鳩の始末で部屋に上がったとき、落とし物をしたかもしれないと思って、それで訪ねたんだ。もちろん勝手に入るつもりはなかった。ドアのチャイムも鳴らしたし」

「落とし物って？」

「黒のパスケース。ぼろぼろだけど。いつもズボンの尻ポケットに入れていたんだ」

「パスケースって、定期券とか入れるやつ？ 中に何か入れていたの？」

店長が身を乗り出して聞いた。

「……家族の写真をね。三十年以上も前の、古い写真だけど」

「どうして私の部屋に勝手に入ったんですか」

「ラジオの音が聞こえたから、てっきり川野さんがいると思ったんだ」

由紀子は毎朝、家でラジオ体操をしている。スマホにラジオのアプリを入れ、朝六時半にタイマーを設定して、時間になれば自動的に音声が始まるようにしている。あの日は寝坊して、ゴミ出しで家を空けている間にラジオ体操が始まったのだ。

「だからって勝手に上がりこむなんて。しかも女の一人暮らしの部屋に」

レイデイがどうの、などと紳士ぶっていたくせに。

「チャイムが壊れているのかと思って、ドアを開けて玄関に入って声をかけたんだ。それ以上は入っていない」

「ダリアのぬいぐるみは？」

「それは……。玄関の下駄箱の上に置いてあったんで、つい。申し訳ない」

「勝手に持ってきちゃったのか？」

店長の声が飛ぶ。

「なんで。ダリアのぬいぐるみなんて、佐倉さんならいくらでも手に入るだろうに」
全くそのとおりだ。

「初めて見るタイプのぬいぐるみだったから、つい……。アニメ作家に見せてあげたら、今後の制作のヒントになるかと思って」

「だからって盗ることはないだろう。それじゃ泥棒だ」

店長が語気を強めた。

「申し訳ない」

どう対応すればいいのか迷っていた。そもそも佐倉の話信じていいのかどうか。家中の掃除と消毒を行い、ベランダにも何度か出ることがあったが、パスケースなんてどこにもなかった。

「朝のゴミ出しのとき、二階から降りてくるのを何度か見ましたけど、あれは？」

「二階に住んでいる知り合いに、菊ちゃんの料理を届けていたんだ」

「ああ、それは本当だよ。ほら、佐倉さん、おかずをテイクアウトしていたでしょ。アパートの二階の人、前は店の常連さんだったんだ。足が悪くて店に来られなくなったから、佐倉さんが家まで届けていたんだよ」

「あんなに朝の早い時間に？」

「夜が早い人だから、ひと晩、僕のところまで預かって、翌朝に届けていたんだ。そうすれば朝ごはんに間に合うから」

聞けば由紀子のとりの部屋の住人だという。佐倉は食事を届けるついでに一階の集合ポストをチェックし、郵便物も一緒に届けていた。由紀子宛ての郵便物が隣のポストに間違っ入っていたことが何度もあり、それで名前を知ったらしい。

「階段の昇り降りが難しいなら、引越せばいいのに」

「引越すお金がないんだよ。それに、年寄りが住み慣れた家を変えるっていうのは、周りが考える以上に大変なことなんだ」

たしなめるような言い方に内心むかつときた。えらそうに。そもそも事の発端はあんたじゃないの。

「私はかなり怖い思いをしたんですけど」

このままでは感情の持って行き場がない。

あの日——佐倉が由紀子の部屋から出てきた日、ダリアの他に盗られたものがないか家中を点検した。現金や通帳は無事だった。親からもらったブランドバッグ、真珠のネックレスもあるべき所にある。家電、靴、服、アクセサリー、化粧品の種類も。となれば、やはりぬいぐるみか。以前、店でUFOキャッチャーの話になったとき、動物のぬいぐるみがほしくて毎週通っていると伝えたところ、佐倉がしきりにうなずいていたのだ。

——なるほど。僕も動物好きだけど、アパートがペット禁止だから諦めていたんだ。そうか、ぬいぐるみという手があったか。

ソファに並べていた分は揃っている。クローゼットのぬいぐるみを全てフローリングの床に並べてみたが、もともとの数と動物の種類を把握していないので、盗られたとしても分からない。数十個のぬいぐるみ一つ一つに除菌スプレーを吹きかけながら、佐倉がクローゼットの中を漁る画が頭にこびりついて離れなかった。

「申し訳なかった」と佐倉がまた頭を下げた。

由紀子はすっかり炭酸の抜けた清酒のグラスに口をつけた。生ぬるい。頭の中はめまぐるしく動いていた。この「事件」をどう扱えばいいのか。糾弾するのか、それとも許すのか。はたまた着地点を見いだすのか。全ては由紀子にかかっている。店長の視線を感じた。由紀子と佐倉を交互に見ながら、固唾をのんで見守っている。

「そろそろ帰ります。明日も仕事なので」

重圧に耐えられなくなって店を出た。もわっとした熱い空気がまとわりつく。それでも暑さのピークは越えた。明日からもう九月なのだ。「菊ちゃん」でも新メニューが登場するだろう。もうあそこに自分の居場所はない。明日からどうやって生きていこう。泣きそうになって夜空を見上げたら、涙が止まってしまった。

一週間が過ぎた。仕事の調子は上がらず、UFOキャッチャーも惨憺たる結果に終わった。顔なじみのアルバイト店員の姿を探したが見あたらない。日曜はいつもシフトに入っているはずだ。通りがかった店員に聞くと、就職活動に本腰を入れるため、先月末で辞めたという。

宅配ピザの電話をかけた誘惑に駆られることは、もうなかった。加奈子の夢も見なくなった。ある晩、ソファで寝入ってしまった。最近よくあることだが、ソファから床にずり落ちたのがいつもと違っていた。ソファとローテーブルの間にはまり込んだ状態で、身動き取れずに仰向けに横たわっていたら、なぜか気持ちが悪く落ち着いた。買い替えただばかりの天井のLED照明が、部屋全体を煌々と照らしている。白く強い光がまるで太陽のようだ。これで消費電力は前の照明よりずいぶん抑えられるというのだからすごい。ずっと見つめていると目が変わりそう、首を横に向けたとき、ソファの下にある平たくて黒い物体が目にとまった。手を伸ばして触れる前から、それが何であるのか分かっていった。二つ折りのパスケースを開くと、古い写真が一枚、はさまれていた。三十くらいの女性と、十には届かないと思われる女の子が、グランドピアノの前で微笑んでいる。顔立ちがよく似ている。よそいきの恰好からして、ピアノの発表会だろうか。「親鸞の最期もいよね。自分の娘に看取られて浄土に旅立ってさ」

耳もとで声がして床から跳ね起きた。からまった髪を手ぐしで整え、玄関の下駄箱の上から鍵を引ったくって廊下に出た。手暗がりのうえに焦っているせいで、鍵穴に鍵がうまく入らない。物音に驚いて振り向くと、隣のドアが開け放たれ、廊下に人が立っていた。アフロヘアに花柄のネグリジェという出で立ちに、ぎょっとした。

「ちよっと、あんた」

女性かと思ったが、声で分かった。

「な、何でしょうか」

黒々としたアフロヘアとネグリジェに惑わされそうになるが、顔は年を取っている。おそらく佐倉とそう変わらないだろう。

「毎朝毎朝、うるさいんだよ、ラジオ。大音量で流しやがって」

「あ……」

たしかにスマホの音量が大きかったかもしれない。それにスマホはいつもベランダの窓枠に置いていた。

「すみません。気がつかなくて」

慌てて頭を下げた。毎朝、ベランダの大きな窓に向かってラジオ体操をするので、そこをスマホの定位置にしていたのだ。でも窓はきちんと閉めていたし、まさか隣の部屋に音が筒抜けだとは思わなかった。

「おかげでこっちは、強制的に『早寝早起朝ごはん』だよ」

「は？」

「早く起こされるから、夜もすぐに眠くなるって話だよ。人の生活パターン、変えやがって」

「すみません、申し訳ありません」

再び頭を下げながら、佐倉が「菊ちゃん」の料理を届けているのは、この人に違いな
いと思った。ということは、佐倉が店に来てテイクアウトをしなければ、この人も食べ
るものに困るのではないか。

「何だよ、なんか文句でもあるのか」

無意識に男性の顔を見つめていたらしい。

「いえ、どうもすみませんでした。以後、気をつけます」

これが最後になることを願いつつ、長めに頭を下げる。

「ぜひ、そうしてもらいたいね。じゃ、そういうことで」

男性はドアの縁をつかみ、体を左右に揺らしながらドアの向こうに消えた。

数分後、「菊ちゃん」のカウンターに座って店長にこの話をする、やはり昔の常連
客だった。少し離れた席の男性客が「懐かしいなあ。元気かな」と、しきりに言うので、
騒音の一件は話さないでよかった。

この時間に来るのはめずらしいね、と店長が言った。今日は店に来るつもりはなかつ
たが、さつき家でこれを見つけたから来たのだと説明し、黒革のパスケースを店長に渡
した。何これ、と店長がパスケースを開く。そのあとで「佐倉さんの」と由紀子は言っ
た。先に所有者を明かすと、店長のことだから中を見ないだろうと思っただの。

「こんな美人の奥さん娘さんと別れて、何があったんだらうね」

しばらく無言で写真を見つめていた店長がつぶやいた。

「店長も知らないんですか」

「俺らはせいぜい十年の付き合いだから。店とお客さんの関係で知り合ったわけだし、
向こうから話さないかぎり、こっちからお客さんのプライベートを聞くことはないよ」

「あれから佐倉さん、お店には？」

「いや、一度も来ていない。俺も心配になってさ、昨日、アパートに様子を見に行った
んだ」

退院翌日に三人で話をして以来、気まずくて店に来ないのかと思ったら、そうではな
かったという。体の具合が悪そうで、と店長は顔をしかめた。食欲がないと言うので、

店に取って返し、ありあわせの総菜をタッパーに詰めて、すぐ持って行ったという。

「菊ちゃんの料理なら食欲が湧くって言うから、明日、また訪ねてみるよ。ちょうど店の定休日だし。一度、病院で診てもらった方がいいと思うんだけど」

「明日、私も一緒に行かせてもらっていいですか？ 私の顔を見たら、余計に具合が悪くなるかもしれないですけど」

「そんなことないよ。佐倉さんも由紀ちゃんのことを気にしていたから。会いに来てくれたら喜ぶと思うよ」

気にするのと、会いたいというのは別のものだと思ふ。自分が訪ねて行って佐倉が喜ぶとも思えないが、とりあえず会わないことには始まらない。

翌日は午後から夏季休暇を取得し、「菊ちゃん」に向かった。店長が用意していた保存食や経口補水液を二台の自転車で積み、アパートまで運ぶ。店長は作りおきのおかずが入った大きな紙袋も携えていた。一階の端が佐倉の部屋だった。駐輪スペースから一番遠いので、自転車を佐倉の部屋の前に停めさせてもらおう。ちよつと待っていてください、と店長に声をかけ、二階の自分の部屋に戻り、玄関に用意していた荷物をつかんで引き返した。

「ぬいぐるみを持ってきたの？」

由紀子が手にしている透明の大きな袋を見て、店長が目丸くした。やはりこれが普通の反応である。

「いや、手土産は何がいいのか散々悩んで、これぐらいしか思いつかなくて」

自分がもらって嬉しいものを、と考えた結果だから仕方がない。空振りに終わる危険性が高いことは承知の上だ。ただ、佐倉なら喜んでくれるという予感があった。

思ったより元気そうな佐倉を見て、「ずいぶん顔色が良くなったね」と店長の声も弾む。「今日は由紀ちゃんも一緒に来てくれたんだ」

どうぞ、と招き入れられ、廊下を通って奥の部屋に入ると、物が少ないせいかわ紀子の部屋よりずっと広く感じた。

「おととい、菊ちゃんに届けてもらった食事のおかげで精がついたのかも」

壁ぎわの小さな座卓の上に、何かのソースが残った空のタッパーと小皿、箸があった。「きちんと食べているみたいだね。けっこう、けっこう」

店長は満足そうにうなずくと、「これは今日の分」と持参した大きな紙袋からタッパーをひとつずつ取り出し、「これはレバニラ炒め」「牛肉のしぐれ煮」と説明しながら座卓の上に並べ出した。「ぶりの照り焼き」「鶏むね肉のニンニク炒め」「鮭とかぼちゃのチーズ焼き」「ほうれん草の白和え」と続き、最後に取り出した「きのこのピクルス」はガラスの瓶に入っていた。

「こんなに食べきれないよ」

「大丈夫。冷蔵庫に入れれば、三、四日はもつから」

「お金、払うよ。さすがにこの量は」

「何言ってるんの。これは差し入れ。俺が勝手にやってることだから」

「しかし……保存食とかスポーツドリンクとかも」

「知り合いの業者からのもらいものだよ。金、かかってないから」

店長はいったん座卓に並べたタッパーをすばやく紙袋に戻し、冷蔵庫、開けるよ、と言っただけと台所に立った。その様子を黙って見ていた佐倉は「これは、早く店に行かないとダメだね」と誰に言うともなくつぶやき、少し笑った。

「川野さんも、こんな汚いところに来てもらって、申し訳なかったね」

急に話しかけられてびっくりした。直後に嬉しさがこみ上げる。こんなふうには話ができるのは、ずいぶん久しぶりのような気がした。

「こちらは畳のお部屋なんですね。間取りが同じで中は違うから、不思議な感じがします」

由紀子の部屋は床がフローリングだった。入居時のリフォームのおかげで、いまだに新築のように美しい。

「川野さんの部屋はすごくきれいで、おしゃれで——」

とたんに佐倉は口をつぐんだ。それから「すまん」とうつむき、正座になり、両膝の上で握りこぶしを作った。由紀子には佐倉の白髪まじりの頭しか見えない。頭頂部は少し薄くなっていた。

「鳩の一件で川野さんの部屋に上がらせてもらったときのことを思い出して、つい……。こないだのラジオ体操のときは違うよ。あのときは玄関しか見ていない。部屋がきれいとか分からないから。それ以外で川野さんの部屋に入ったこともない。でも、本当に申し訳なかった。ダリアを勝手に持って行ってしまったことも悪かった」

うつむいたまま一気に話す佐倉の前に、頭が追いつかない。せつかく普通に話ができそうだったのに、とがっかりしている自分がある。足を崩していたのを急いで座り直した。目の前で年長者が正座をしているのに、自分がそうしないのは良くないことだと思っただけ。

「あれ、二人して正座で向かい合ったりして、どうしたの」

台所で洗い物をしていた店長が戻ってきて、由紀子と佐倉から等間隔の位置にあぐらをかいた。

「分かりました」

佐倉の頭頂部に向かって言った。

「言っていることは分かりました。とりあえずしっかり食べて、体に気をつけて、元気になってください。話はそれからです」

うつむいているので、やっぱり表情は分からない。いつまでこうしているつもりだろうか。ぬいぐるみの入った袋を佐倉の前に置くと、ようやく顔を上げてくれた。

佐倉は大きな袋を膝に抱え、透明の袋ごしにぬいぐるみを見つめていた。そばで店長が声をかけていいものかどうか迷っている。

選りすぐりの動物たちです、と言ってみた。特にキリンとシカは貴重なんです、と付け加えると、佐倉と目が合った。それで弾みがついた。

「キリンは首が長いし、シカは角があるから、UFOキャッチャーの細くて頼りないアームでつかむのにコツがいるんです。この一年ずいぶん苦労して、ようやくゲットしたのがそれです」

正直、手放すのは惜しいが、できるだけ多くの動物をプレゼントすると自分で決めたのだから、未練は断ち切らないといけない。

「そんな貴重なものを僕がもらっていいのかな。いただいたものを返すのは失礼かもしれないけど、キリンとシカは返そうか？」

「いえ、いいんです。もらってください。キリンもシカも、動物園には当たり前前にいる動物ですから」

「動物園？」

「動物園が好きだって、前におっしゃったでしょ？」

「そうだっけ」

「そうですよ」

正確には「娘が動物園が好きでね」と言ったのだ。それで自分も動物園が好きになったのだと。「菊ちゃん」での佐倉の話を、由紀子ははっきり覚えていて。

——上野動物園に家族三人でパンダを見に行ったんだ。あのときの娘の喜びようといったら、なかったよ。そのとき思ったんだ。娘の姿をこの目に焼き付けておこうと。自分はこの光景をたぶん一生忘れない。今後、何があっても、今日の思い出があれば乗り切れると。だからその日、僕は娘と妻の方ばかり見ていて、パンダの記憶が全然ないんだ。

佐倉はいつもより飲んでいて、そのせいか滑らかな話しぶりだった。よくある話だと思っただが、何かにつけて思い出す。娘と妻がパンダ舎の前で大はしゃぎする姿と、それを見守る若い佐倉の姿。パステル色の写真を見たあとでは映像がいつそうクリアになり、まるで自分の実体験のように、鮮明な記憶として由紀子に定着している。

残念ながら、パンダはもともとUFOキャッチャーの景品にはない。そのかわり今日は別のぬいぐるみを持って来た。おそらく佐倉が一番ほしがるであろうぬいぐるみ。いや、今となつては、そうは思わないかもしれない。それならそれでかまわない。自分が佐倉にこれをあげようと思ったことが重要だった。

店長が佐倉に対してああだこうだと栄養指導をしている間、やることもないので部屋を眺めていた。佐倉はここに住んで長いのだろうか。壁沿いにカラーボックスが横向きにいくつか並べられ、中に文庫本がぎっしり詰まっている。背表紙を見るとミステリーや歴史ものが多かった。タイトルに「歎異抄」の文字が入った本も数冊ある。座卓をつ

けている壁と反対側の壁沿いのカラーボックスには、大量のビデオテープが詰め込まれていた。どのテープもタイトルを記入する白い部分が黄ばみ、由紀子も名前だけは聞いたことのある任侠映画、特撮映画のタイトルが手書きされていた。カラーボックスの上には大きな液晶テレビ、埃をかぶったビデオデッキなどが置かれている。

佐倉と店長が何やら押し問答をしている。例の由紀子の隣人にどっちが食事を届けるかで揉めているのだった。

「だから、テイクアウトの料理を届ける役目は、俺が引き受けるよ。佐倉さんはまだ無理をしない方がいい」

「いや、ああ見えて、すごく他人に気をつかう奴なんだ。小心者と言ってもいい。菊ちゃんもよく知っているだろ。今までどおり僕が届けるよ。同じアパートに住んでいる僕がほんのついでに、というのが、あいつにとつて気をつかわなくてすむギリギリのラインなんだ。もし菊ちゃんが届けたら、わざわざ申し訳ないって、テイクアウトを利用しなくなるかもしれないだろ」

「店からアパートの距離なんて知れているじゃないか。もと常連さんだし、支払いもきちんとしているし、店にとつても大事なお客さんだよ。水くさいこと言わないで、届けるぐらいは俺にさせてくれよ。変な気をつかわないでほしいな」

議論が白熱しておさまる気配がない。由紀子は店長に一票入りたい。佐倉はなぜそこまで自分が届けることにこだわるのだろう。すると、タイミング良く答えが分かった。

「え、会いたくないってどういうこと。俺、あの人に嫌われてるの？」

「いや、嫌いとかそういうことじゃなくて。苦手なんだよ、人と接するのが」

「何それ。もと常連さんだよ？ 知らない仲じゃあるまいし。前は店でしょっちゅう会っていたのに」

「だからこそ今は会いたくないんだよ。昔と今じゃ、いろいろ事情が違うから」

「佐倉さんならいいのか？」

「同じアパートだから、たまに顔を合わせるんだよ。ゴミ出しとか集合ポストに郵便物を取りに行くときとか。最近どう、とか言葉を交わすうちに、膝が痛くて外に出られないから宅配弁当ばかり食ってるっていう話になって」

「うちの店でテイクアウトをする前の話？」

「そう。菊ちゃんはどうしてるって聞かれてさ。僕が今も店に通っていると言ったときのあいつの羨ましそうな顔、菊ちゃんに見せてやりたかったよ」

「そうか」

「だからあいつにも菊ちゃんの料理を食べさせてやりたいと思って、僕から提案したんだ。でも、わざわざ悪いからいいよって、僕にすら気をつかいてくるから、オッケーさせるまでに大変だったんだ」

「佐倉さんが入院している間は、どうしてたの」

そうそう、それが知りたいと由紀子も思った。

「宅配の弁当や丼ものを頼む回数が増えるだけだよ。もともと菊ちゃんのテイクアウトだけで全ての食事をまかなっているわけじゃないから。菊ちゃんの料理はハレの日の食事なんだって。美味しくて品数が多くて季節感があつて、たまに食べると豊かな気持ちになるって言っていたよ」

「うちの料理がハレの日の食事か。そう言ってくれるのはありがたいけど、そんなたいそうな店じゃない。ぜひ、ケの日に食べてもらいたいね」

「ハレの日が週に一回もやって来るなんて贅沢すぎるって」

「そう言ってたの？」

「うん。それ聞いたとき、何というか……」

佐倉が顔をそらして後ろを向いた。店長は黙ってその背中を見ていた。

あのアフロおじさんは、ラジオ体操の音もずっと我慢していたのかも知れない。由紀子がラジオ体操を始めたのは半年も前だ。それ以来、ずっとスマホのボリュームは変わらなかったし、置き場所もずっとベランダの窓枠だった。

月曜の朝。燃えるゴミの袋を持ち、空いている方の手で玄関の鍵をかける。ドアノブを回して施錠されたことを確認して外階段の方を向くと、一番下の段に隣人が腰をかけた。アフロヘアに花柄のネグリジェという後ろ姿である。階段の左右に目を向けると、アパートの前に近所の住民らしき人々が数人ずつかたまつて立っているのが二階から見渡せた。

階段をおりてアフロおじさんの横で立ち止まった。

あの、と声をかけた。大儀そうに顔を上げたおじさんは、力のない眼差しで由紀子を見た。

「隣の川野です」

おじさんはピンと来ない様子だ。

「先日はラジオの音でご迷惑をおかけして、すみませんでした」

「ああ、あんたか」

ようやく分かったようだ。

ひそひそと立ち話をしている人たちが、ちらちら同じ方向を見ていることに今さら気づいた。彼らの目線の先を辿ると、一階の端のドアが全開になっていた。

「昨日、久々に電話があつてさ。今日の朝、料理を届けるって言うから待っていたんだけど、全然、来ないから」

携帯電話を握りしめた手で鼻をこすりながら、おじさんが途切れ途切れに言った。私に話しているのだろうか。急にもやがかった頭で由紀子は思った。

「何回電話しても出ないしさ。こんなこと今までになかったから、様子を見に来たんだ」

携帯電話を持っていない方の手で、片膝をさすり続けている。

「おはようさん」

こちらに近づいてきた白髪の小柄な女性が、由紀子を見て言った。どこかで見たと思つたら、このアパートの家主だった。

「あんたも朝から大変やったな」と家主はアフロおじさんに声をかけた。「電話くれて助かったわ」

アフロおじさんは無言だった。

「でも、よくうちの電話番号を知っていたなあ」

「管理会社に聞いたから」

ぼそりとつぶやいてから、アフロおじさんは腕を伸ばしてアパートの扉を指差した。腕の下でネグリジェが振袖のように揺れた。扉に取り付けられた小さな看板に「空室あり」とあり、その下に電話番号が書かれていた。「あ、なるほど」と家主はうなずき、「ご苦労さん」と言い残して離れていった。

今日に限って、起きる時間が遅かったことを由紀子は悔やんだ。いや、祝日だから仕方がない。休みの日は、ラジオ体操は再放送の時間に合えばいいということにしている。たとえ平日と同じ時間に起きてても、何が変わるわけでもない。あれから店では会わなかった。でも、店長からは元気にしていると聞いていた。

アフロおじさんはまだ膝をさすり続けている。一階におりてくるのは大変だっただろう。

ドアが開きつばなしになっている部屋にゆっくりと向かった。ドアの横に取りつけられたサビだらけのポストに、手書きで名前が書かれていた。こないだ訪ねたときには気がつかなかったなと思った。立ち止まってしばらく名前を見ていた。手からゴミ袋が離れて地面に転がった。すつと背すじが伸び、堂々とした足取りで玄関前に立った。制服警官や他の人たちが左右に分かれた。「ご親族のかた？」とささやく声がした。

廊下を通って奥の部屋の入口に立った。正面に北向きの大きな窓があり、部屋全体を朝の光がぼんやりと照らしている。壁に画びょうで留められたカレンダーが目に入った。これも前に来たときは気づかなかった。窓の方に頭を向けて、人が布団で寝ていた。ぬいぐるみが枕もとを囲んでいる。キリン、シカ、ライオン、コアラ……どれも見覚えがあった。

敷居をまたいで中に入ろうとする由紀子を、警官が腕を出して制止した。顔が見たかった。安らかな顔をしているだろうか。そうであってほしいと念じた。

「なんでしようなあ、このぬいぐるみは」

誰かがつぶやいた。

遠すぎて顔が見えない。

枕もとの一番近いところにダリアがいた。くすんだ朝日に包まれたダリアが、枕もと

をじっと見つめている。その白い頬に付着した赤い筋が、まるで涙の跡のように見えた。

〈原稿用紙換算 一四一枚〉

〈了〉